

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.168

2007年5月

平成19年度入学式を挙



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

## 目次

●ニュース	
平成19年度入学式を挙	3
第12回経営協議会を開	8
退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催	8
平成19年度新規採用職員研修を実施	8
外名大を特別表彰	9
平成19年度「国際的な産学官連携の推進体制整備」に採	9
平成19年度春季全学留学生オリエンテーションを実施	9
豊田章一郎トヨタ自動車名誉会長が赤崎記念研究館を見学	10
平成19年度科学技術分野の文部科学大臣表彰者が決まる	10
愛知血液疾患研究財団からの寄附にかかる目録及び感謝状贈呈式を挙	11
二村医学系研究科教授への感謝状贈呈式を挙	11
シンポジウム「津波」を開催	12
●知の未来へ	
花の中の秘密を探る 東山 哲也（大学院理学研究科教授）	13
●知の先端	
資源・環境問題と世代間の衡平性 奥村 隆平（大学院経済学研究科教授）	14
●学生の元気	
平成18年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば	16
大学のためのコミュニティシステム	18
高井 一輝（大学院工学研究科電子情報システム専攻博士課程前期課程2年）	
●部局ニュース	
「アートキッズ'07」を開催	19
台湾国立成功大学文学院学術文化交流訪日団が文学研究科を視察	19
平成19年度教育学部附属学校入学式を挙	20
ベトナムで日本法教育研究センター準備室の開所式を挙	20
UCLA との工学部協定締結記念国際シンポジウムを開催	21
小型シンクロトロン光研究センターの看板上掲式を挙	21
「第4回モノづくり市民公開講座」を開催	22
チュラロンコン大学による実地研修を受け入れ	22
平野総長が地球水循環研究センターを視察	23
ICCAE 2006年度第8、9、10回オープンセミナーを開催	23
●新名誉教授のことば	24
●資 料	25
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成19年3月16日～4月15日	28
●INFORMATION	
第48回名大祭を6月7日(木)～10日(日)に開催	32
●イベントカレンダー	33
●ちょっと名大史	
地域社会に支えられてきた名古屋大学	36

# 平成19年度入学式を挙





4月5日(木)、平成19年度名古屋大学入学式が、愛知県体育館において挙行されました。例年は、豊田講堂で式典を挙行していますが、2年後に本学が帝国大学として設置され70周年を迎える記念事業の一環として、改修・増築を行っているため、平成18年度卒業式に引き続き、愛知県体育館にて行いました。

本年度の入学生は、学部2,222名、修士課程及び博士課程前期課程1,644名、大学院法学研究科専門職学位課程(法科大学院)83名、医学博士課程及び博士課程後期課程539名です。

午前10時、名古屋大学交響楽団が演奏する「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲(ワグナー作曲)で始まった式典では、平野総長から入学生を歓迎する旨の辞が述べられました(詳しくは、総長の辞をご覧ください)。その後、各研究科長等の紹介があり、次いで、法学部入学生の水谷 剛さんと大学院文学研究科博士課程前期課程入学生の白岳エリコさんが入学生総代として、入学に当たって、学生としての本分を全うすることを宣

誓しました。

引き続き、来賓として、名古屋大学全学同窓会副会長の岡田邦彦氏(株式会社松坂屋代表取締役会長)から、先輩として心のこもった祝辞をいただきました(詳しくは、来賓祝辞をご覧ください)。

その後、名古屋大学混声合唱団が、歓迎の歌として学生歌「若き我等」、「かもめ」を合唱し、名古屋大学交響楽団による「威風堂々」(エルガー作曲)の演奏とともに、式典は幕を閉じました。

式典終了後、引き続き同体育館において、学部入学生に対し、「生協ガイダンス」及び学生によるサークル紹介「入学祭典」が行われました。様々なサークルによる趣向を凝らし

たステージパフォーマンスに、会場は大いに盛り上がりました。

なお、入学式の模様は、現在、本学のホームページ([http://www.nagoya-u.ac.jp/broad/h19\\_ent.html](http://www.nagoya-u.ac.jp/broad/h19_ent.html))で視聴することができます。



# 総長の辞

平野 眞一

名古屋大学学部・大学院に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。名古屋大学を代表して、皆さんのご入学を心から祝福し、歓迎します。名古屋大学は、本日ここに、2,222名の学部入学生を、また修士課程及び博士課程前期課程1,644名、専門職学位課程83名、医学博士課程及び博士課程後期課程539名の入学生を迎えました。皆さんは、澆刺とした気分で、高い志を持ち、また胸躍らせてこのときを迎えられたでしょう。ぜひ、この気持ちを大切にしてください。大学も、皆様のこの気持ちを大切にしたい教育・研究の環境を提供します。

例年は、名古屋大学のシンボルである豊田講堂で式典を挙行しております。しかし、豊田講堂は建設されて45年以上になり、2年後に本学が帝国大学としての創立70周年を迎える記念事業の一環として、改築・増築工事をトヨタ自動車株式会社及び関係会社のご理解により進めておりますので、本年に限り、ここ愛知県体育館で式典を執り行っております。

名古屋大学は、前身である医学校から始まって約135年、名古屋帝国大学として1939年の開学以来68年の歴史の中で、多くの非常に優れた研究成果を生み出し、社会に貢献する人材を育ててきました。そのような輝かしい成果を挙げてきたのは、名古屋大学の誇るべき自由闊達な学風のもとに、知の創造の源が優れた教育・研究者群の存在と自由な発想の奨励の重要性にあると深く信じて邁進してきたことにあると考えております。大学は、優れた教育・研究を行う義務を社会に対して負っております。名古屋大学は、人文科学、社会科学、自然科学をともに視野に入れた高度な研究と教育の創造的な活動を通じて、世界屈指の知の創成と将来を担う人間性豊かな勇気ある知識人を育成することによって社会に貢献していきます。「学」はまさに「HUMANITY」そのものであります。「学」の発展のためには、人文科学、社会科学、自然科学の強い連携が必要です。名古屋大学は、総合大学としての特長を生かし、人間性と科学の調和的発展を視野に入れた高度な教育と研究を行っている、皆さんが誇れる大学であります。皆さんには、総合大学に学ぶ学生として、豊かな人間性を持つ、国内外での指導的役割を担うリーダーとしての素養を身につけてもらいたいと思います。文系・社会系を専攻する方は、もう一度理系の基礎を学び、理系を専攻する方は、文系・社会系の基礎を身につけて社会の仕組みを学んでいただきたい。

皆さん、ここで、「生を受けて学ぶことが出来る今ある自分の環境に感謝」とともに、今一度胸に手をあてて自問してみてください。「何を求めて、何をしたいか名古屋大学に入ってきたか」と。「自分が最善をつくすものは何か」



を早く見出し、その夢を実現するよう努力していただきたい。人生に、生まれながら与えられた道はありませんし、決められた道はありません。自分の前にある道は一本ではありません。道は、その環境の中で、自分で切り開いていくものです。何時までもくよくよして、自分探しと称して逃避しないでほしい。自己を確立すること、置かれている場で最大限の努力をすることが先決であります。「人生の実りは、日頃から貴方がどんな種子を蒔いたか」が重要です。「人生の種子」とは「考え方」あるいは「心構え」といってよいかも知れません。責任をもって、自分の人生という畑に種子を蒔きましょう。大学は、その種子を育てる環境を提供します。

20世紀は、欧米に追いつき、追い越すために大きな努力が払われてきた時代であり、物質文明を飛躍的に発展させてきました。しかし、一方では、人間とのインターフェイスが弱かったために、人類全体に関わる幾多の問題が残されていることも事実であります。今は、「人」を基軸においた、心の豊かさを大切にしたい安心・安全な持続可能な社会を構築するために、叡智を結集し行動する時期であります。国、大学、産業界は大きな転換期にありますが、目的と動機を失わず、勤勉・誠実に新しい時代を創り上げるために努力すれば、活力ある社会に再生することは可能であると確信しております。

皆さんも、新しい社会の創生に向けて、我々とともに真摯に取り組んで下さい。皆さんは、今後の世界をリードすることが期待されている方々なのです。今や、私どもはグローバル化の中でその存在を示さなければなりません。そのために、世界に通じる人間性と基礎学力に加えて自分の考えで議論できる総合力を身に付けていただきたい。

と同時に、現在、世界で、日本で何が起きているかに、鋭い目を向けてください。我が国の将来を担うのは皆さんです。希望の持てる社会にしなければなりませんし、国際

的にも責任ある国にしなければなりません。皆さん、キャンパス内では非常に多くの留学生に会うことでしょう。名古屋大学には、約70ヶ国から1,200人を越える留学生が学んでおり、その数は全国の国立大学でトップクラスであります。「キャンパスはまさに素晴らしい国際交流の場であり、小さな地球」であります。積極的に留学生と交流し、お互いの言語や文化、歴史を学びあい、理解しあって下さい。留学生の皆さんは、日本の文化はもとより他の国の文化を学び、交流の輪を広げてください。グローバル社会においては、人間関係はどんなものより大切であります。皆さんには、名古屋大学で満足して学ぶことができる環境を整えます。皆さんは、ぜひ国際的に活躍できる基礎を築いてください。

わが国では、大学のあり方が議論されておりますが、大学における教育とは、優れた人間性を有する教育者集団によって、「物質的経済的側面に偏ることなく、精神的文化的側面にも充実したバランスの取れた人間性豊かな知の担い手」を育てることにあると思っています。大学は、学術・文化の担い手であらねばならない、と思っております。その環境の中で皆さんを育てていきます。

皆さんは、今後、このような教育・研究環境のなかで学んでいくこととなりますが、新しい時代を創り出す「高い志」を持ち続けて積極的に学んでください。貴方たちには、ダイヤモンドの原石のように潜在力があります。自分を磨けばより輝き光り、人をひきつけます。大学はその環境を用意しますが、自分でも研鑽して欲しいと、希望します。

学生生活のもう一つの重要な活動は、多くの教職員と交流し、人生の機微を学ぶとともに、互いに心から信頼しあえる真の友人を作ることです。また、大学は、ただ単に知識の吸収の場であるばかりでなく、全人教育の場でもあります。全人教育にあっては、課外活動である部活動が果た

す役割は大きいものです。最近、人間関係が希薄であるといわれておりますが、部活動では、同僚間、また卒業生の会等を介して広い世代の人間との交わりがあり、活動は今後の人生において大切な財産になります。名古屋大学は、運動関係の部活動が活発な、文武両道に通じる人間教育を目指している大学のひとつであり、新聞でも取り上げられているように各種の競技大会でも活躍しております。「学習」する意欲を失わず、同時に部活動などを通じて実りある大学生活を送り、総合大学の学生として良い人間関係を築き、心身を磨き、学問的にも人間的にも大きく成長されることを期待しています。

大学では、何かを漫然と待つのではなく、自分から求めて積極的に行動してもらいたい。受身の姿勢では学問をする情熱や喜びを感じることは出来ません。自ら問題意識をもって積極的に勉学し、行動してこそ、知の探求、真理を探究する楽しみが生まれます。講義では、これまでに人間が人文と社会と自然の諸現象を観察し、理論化し、体系づけてきた学問体系の形成過程を教え、専門的な知識に裏付けられた批判的な思考力と構成力を養うようにしていきます。いまだ分かっていないことがどれだけ多くあるかを知ることになるでしょう。これは皆さんの好奇心を刺激し、学習意欲を掻き立てることになるでしょう。

最後に、私の好きな論語の中から、「知識と思考の両輪がそろって、はじめてそれらを役立てることができる」ことを言っている部分を紹介して、皆さんの成長を期待します。

「学<sup>すな</sup>びて思<sup>く</sup>わざれば、則<sup>すな</sup>ち<sup>く</sup>罔<sup>ら</sup>し  
思<sup>あや</sup>いて学<sup>あや</sup>ばざれば、則<sup>すな</sup>ち<sup>く</sup>殆<sup>ら</sup>うし」

皆さんの今後の活躍と明るい将来を心から祈念しています。

以上をもって、入学生への辞といたします。



## 来賓祝辞

岡田 邦彦

名古屋大学全学同窓会副会長  
株式会社松坂屋取締役会長

ただ今ご紹介いただきました全学同窓会副会長の岡田でございます。皆さんが名古屋大学の学部並びに大学院にめでたくご入学されましたことを、心よりお喜び申し上げます。皆さんは本日、名古屋大学に入学されると同時に、実は名古屋大学全学同窓会の準会員として仲間に入っていたこととなります。全学同窓会の会員数は、皆さん、在學生、卒業生、研究生、教職員を全部加えますと、約10万人という大人数になります。ですから皆さんは今日、10万人規模の、いわば人脈ができたということになるかと思えます。同窓会の値打ちはたくさんありますが、まず人脈です。比較的新しい英語ですが、“ノーファー(Know-Who)”，誰を知っているかということです。ノーファーはアメリカのシリコンバレーあたりで使われるようになった言葉です。同窓会というものは、巨大な人脈につながっているということです。

名古屋大学全体の創立は1939年、昭和14年ということですから、68年前で、私よりは若いですが。しかし、各学部の創立は非常に古くて、一番古い医学部は1871年、明治4年と、136年前にさかのぼります。私が卒業しました経済学部の前身は1920年ということですから87年前にさかのぼります。このように長い歴史を持って、大変多くの先輩によって築きあげられました名古屋大学という、いわばブランドの価値というものは、なかなかのものでありまして、是非とも皆さんにも誇りを持っていただきたい。英語でいえば、ネーム・イズ・プライド(Name is pride)です。名古屋大学というネームにプライドを持っていただきたいと思えます。同時に、“キープ・ユア・ネーム・クリーン(Keep your name clean)”ということ。この名前を是非とも大事にして汚さないようにしていただきたい。キープ・ユア・ネーム・クリーンということで、お願いしたいと思えます。

これからの学生生活において、皆さんがどのように学んだらいいのか、どのように生活したらいいのか、この答えは皆さんお一人おひとりが自分で真剣に考えていただくテーマです。皆さんはすでに立派な成人であり、自由な判断をする権利があります。同時に自己責任を問われるという立場にあります。私は名古屋大学を卒業してから49年、来年で50年という長い年月が経ったわけですが、振り返ってみますと、学生時代に学んだことは、やはり役に立っている。何度も、それどころか、その学んだことで助けられたことがずいぶんあります。若い皆さんを前に、少しで



も充実した学生時代を過ごしていただくためのヒントになるかと思ひ、二つ三つお話ししたいと思います。

特に学部入学の方に申し上げたいのですが、皆さんが小学校中学校高校という流れの中で勉強してこられたことは、“このうち正しい答えはどれですか、正しいものに丸を打ちなさい”というように正解を求める勉強をしてこられたと思います。ところが大学で学ぶべきことは少し違います、いや、大いに違うといってもいいかもしれないですね。皆さんが大学を出て実社会へ入られるとすぐ判かることですが、正解は一つではないという世界が皆さんを待っているということです。分かりやすい英語でいいますと、ゼア・イズ・ノット・ワン・ライト・アンサー(There is not one right answer)ですね。必ずしも一つの正解があるというわけではない。いろんな要素、たとえば人間、時間、空間、いろいろな物事、それが複雑に絡み合っ、いろいろな答えの選択肢が出てきます。昨日正しかった答えが今日、正しいとは限らないという場合さえあります。そういった時に、それではどうするのかということですが、決め手は判断力しかないですね。

では、その判断力をどう磨くかということですが、やや抽象的になりますが、判断力の基礎は「知」、知識の知です、それから「情」、人情の情です。それから「意」、これは意志の意です。この「知、情、意」というものをバランスよく伸ばしていくというのが、実は教育の理想と昔からいわれております。ギリシャ哲学でも、知はロゴス、情はパトス、意はエトスです。これを私は記号に置き換えると、四角と丸と三角ではないかなというふうにして2年前の入学式で申し上げたことがありますので、同じこととお話してみたいですね。

イメージとして知は四角だと私は思っています。この四角は努力することによって、いくらでも大きくすることができます。知の基礎はリテラシー、くだけた言い方をすると、読み書きそろばん、読み書き算数という力です。スリー

アール(3R)ともいいますね。リーディング、ライティング、アリスティック (reading, writing, arithmetic) です。これは今後、いくらでも学び続ける必要があります。皆さんも高校を出られたから、読み書き算数はできているかという、決してそんなものではありません。知の勉強は無限に続きます。生涯学習の時代と言われますが、この知を磨く習慣を是非作っていただきたい。これは単純なことだと思いますと、読書の習慣を捨てないでくださいということです。本は必ず読んでいただきたい。それから文章を書く習慣も是非、持っていただきたい。日記を付けるのが本当は一番いいんですけども、そうでなくても自分の感想、あるいは文章で写生するという方法もあります。たとえば名古屋大学へ入った時の印象をノートに書き留めておくということは、のちの時代にすごく役に立つと思います。それから、ポキャブラリーを増やすということです。アメリカのビジネスマンは、ポキャブラリーの数と給料の額は正比例するというふうに思っております。ですから語彙を増やすのに大変熱心です。日常生活でもクロスワードパズルをやりながら自分のポキャブラリーを増やしているというのがアメリカ人ですが、日本でもやはり語彙を増やすことは、考える力を強くするのに役立つということです。たとえばそういったことを、知は四角と思って、どんどんためず学んでいただきたいということです。

次に、情というのは、心なんですね。これは丸で表したいと思うのですが、一言でいうとコミュニケーションする力です。ビジネスの世界に入りますと、いろいろな交渉、部下に対する説明、株主に対する説明、説得、さまざまなコミュニケーションを図る必要があります。自分の会社の話で恐縮ですけど、私共は最近、大丸百貨店と松坂屋の統合を発表いたしました。こういう交渉ごとというのはコミュニケーションなしには絶対にできないことです。このコミュニケーション力を磨いていただくこと、具体的に言いますと、大学で生涯の友情を築いていただきたいということです。今日お互いに見も知らない仲間がたくさん集まっているわけですけども、いろんな活動の場を通じて、友情を築いていただきたい。最近、私が心配しておりますのは、人と一緒にいるのが苦痛だとか、一緒に喫茶店に入っても、お互い話しないでマンガばかり見ているという若者が増えていると聞きます。そうでもないのかもしれませんが、実は心配しております。やはり相手と心を通わせるというのが、皆さんの大きな勉強のテーマです。皆さんの、自分の体をご覧いただきますと、耳が二つ、口が一つですね。相手の話に耳を傾けるというのがコミュニケーションの第一歩です。そして自分の考えを一つの口で伝えること、これが基本です。是非、情も大事にして、その丸を大きくしてもらいたい。

それから意は三角で、エトスです。いわば倫理観です。自分が正しいことをやっているのか、やっていないのかということです。人生における方向感覚が意であると私は思います。人間については性善説、性悪説、いろいろありますけれども、私の体験から言いますと、性弱説です。人間

の性というものはあまりに弱いものです。何か誘惑があると、ついふらふらになってしまうようなことがあるんですね。若いうちはそういう誘惑に負けて、授業料を払うといえますか、ケガすることもあるかもしれません。でも、それはなければいいんでありまして、絶えず自分が正しい方向を向いているかという、三角形の向きの形を考えていただくというのが、私の知情意、四角丸三角、これを磨いてくださいというメッセージです。

先ほど総長からもお話がありましたように、世界は大きく動いております。是非世界に目を向けていただきたい。世界の動きを示すキーワードを私は三つ考えました。その一つはグローバリズムです。世界は一つである。中国語では全球化(ゼンキユウカ)というんですね。たとえば数分前にアメリカの大統領が話したことは、すぐインターネットで手にすることができます。そういう時代であります。

それからもう一つはグリーンング。これは環境保護の動きです。私たちが生きている、この地球という宇宙船は、いつまでもつのかという危機感があります。ゴア前副大統領の「不都合な真実」という本が大変話題を呼んでおりますけれども、今地球は危ないという危機感が非常に皆を、世界を覆っているというふうに思います。

もう一つはグレーイングというんですが、高齢化のことです。65歳以上の人を高齢者といいますけれども、この割合がどんどんどんどん高まっております。そういう世の中では、今までとは違ういろんな新しい仕組みが求められます。グローバリズムとグリーンングとグレーイングというような動きが今、世界を動かす大きな力になっております。そういったことにも是非、目を向けていただきたいなと思います。

大学生活でもどんな生活でも、三日三月三年(みっか・みつき・さんねん)という危ない時期があります。三日たつと、ちょっと嫌になります。三月たつと、これでいいのかという疑問がわいてきます。三年たつところで、どうしようかな、もうやめちゃおうかなということがあるんですね。ですけども、実際はそういう一寸先闇というふうに思った時こそ、本当は一寸先に光がある。だから一瞬先闇という言葉は忘れて、“一寸先に光”というふうに思って、人生を前向きに進んでいただきたいと思います。どんないいことを考えても実行するということは大変難しいんですね。私の好きな言葉に、“ゼロから1までの距離は1から1000までの距離より長い”というのがあります。いいことを考えついてもなかなかやろうとする気が起きない。ですから是非、ゼロから1までの距離は1から1000までの距離よりも長いと考えて、行動力を発揮していただきたいなと思います。

本当は1時間ぐらいお話したいところではありますが、時間も限られておりますので、本日の皆さまに、それから今日はご父兄の方もたくさんいらっしゃると思いますが、本当に心からおめでとうを申し上げて、私の祝辞とさせていただきます。

本当に本日はおめでとうございました。

## 第12回経営協議会を開催



経営協議会の様子

第12回経営協議会が、3月24日(土)、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

会議では、平野総長のあいさつの後、平成19年度年度計画、平成19年度学内予算配分額、平成19事業年度における長期借入金の借入れ及び償還計画、人件費の概要、職員給与規程等の一部改正について、担当理事から説明が行われ、審議の結果、了承されました。

また、外部委員からは、年度計画の策定方法、本学における教育方法、医学部附属病院等における情報管理等について、貴重なご意見が多数寄せられました。

続いて、名古屋大学一般選拔出願状況、名古屋大学大学院の進路状況及び充足率、理事等の交代、次期経営協議会委員等について、総長及び担当理事から報告が行われました。

## 退職者表彰式及び退職職員懇談会を開催



記念撮影

本学退職者表彰式が、3月29日(木)、シンポジオンホールにおいて挙行されました。

これは、本年3月31日付けで退職する勤続30年以上の職員を表彰するもので、表彰式には、被表彰者56名のうち48名が出席し、平野総長から一人ひとりに表彰状と記念品が手渡されました。続いて、総長から祝辞があり、永年にわたる本学への尽力に対する感謝のことが述べられました。

引き続き、ユニバーサルクラブにおいて、退職職員懇談会が開催され、上記被表彰者のほか、3月31日付けで定年により退職する職員をはじめ、関係者が出席しました。佐分理事のあいさつの後、退職者を代表して永田総務部長から謝辞が述べられました。

退職者は、出席者と今日までの思い出などを語り、別れを惜しんでいました。

## 平成19年度新規採用職員研修を実施



新規採用職員の集合写真(手前中央は高橋事務局長)

平成19年度新規採用職員研修が、4月3日(火)から13日(金)までの9日間にわたり、野依記念学術交流館等において実施されました。本研修は、国立大学法人職員としての心構えを身に付けるとともに、業務遂行にかかる基礎知識及び能力を養成することを目的に実施され、新規採用職員26名が受講しました。

研修では、平野総長による大学の現状についての説明及び新規採用職員への期待を込めた講話があった他、本学の組織・歴史、各部署での業務概要及び戦略等についての講義や、ビジネスマナー研修が行われました。12、13日には中津川研修センターにおいて宿泊研修が行われ、受講者は、真剣にグループ討議及び発表に取り組んでいました。また、技術職員等による安全衛生講習や外部講師による接遇マナー、身近な労働法の講義等もあり、受講生全員が所定の課程を修了し、修了証書が授与されました。受講生の今後の活躍が期待されます。

## 舛名大を特別表彰



舛名大（左）に表彰状を授与する平野総長（右）

今春本学工学部を卒業の舛名大（田中周一さん）に対する表彰式が、3月30日（金）、本部1号館総長応接室において行われました。

舛名大は、国立大学出身者としては史上3人目の大相撲力士となり、初土俵となる平成19年1月場所では序ノ口優勝決定戦に進出、翌3月場所も序二段で5勝2敗の好成績を収めるなどの活躍をしたことから、本学体育会の活動を広く社会にアピールしていると高く評価され、今回特別に表彰することとなったものです。

舛名大は、平野総長に3月場所の結果を報告し、その後、本学体育会会長でもある総長から表彰状を手渡されました。表彰状を手に舛名大は、来場所に向けての抱負を語り、総長始め出席者からは、期待を込めた激励の言葉がありました。

## 平成19年度「国際的な産学官連携の推進体制整備」に採択

平成19年度文部科学省「国際的な産学官連携の推進体制整備」に、本学が採択されました。

この整備事業は、我が国の国際競争力の強化を図るため、「国際的な産学官連携の推進体制」を整備し、国際知財人材の育成・確保、海外における基本特許の戦略的な取得、海外企業からの受託研究、共同研究の拡大等、大学等における国際的な産学官連携活動を強化することを目的とし、平成15年度から実施されている同省「大学知的財産本部整備事業」の一環として、同事業の対象機関からの申請に基づき選定されるもので、申請された33件より本学を含む12機関が採択されました。

本学の取り組みは、中部地域の国際産学官連携の中核大学としての役割を担うことや、海外ベンチャーとの共同研究促進など特色ある計画となっているとして評価されました。

## 平成19年度春季全学留学生オリエンテーションを実施



説明を熱心に聞く留学生

平成19年度春季全学留学生オリエンテーションが、4月10日（火）、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて実施されました。本オリエンテーションは、新入留学生を対象とし、入学を歓迎するとともにキャンパスライフや日常生活を支援するためのもので、100名を超える留学生が参加しました。

まず、DVDによる本学の紹介があり、次に、石田留学生センター長から歓迎のあいさつがありました。その後、本学で実施される日本語教育プログラムや図書館の利用について、説明が行われました。引き続き、松浦留学生相談室長等から、留学生が直面するカルチャーショック等の異文化への適応や、それに対する留学生支援体制についてのガイダンスがありました。

担当者の熱心な説明に、参加した留学生は真剣な表情で聞き入っていました。

## 豊田章一郎トヨタ自動車名誉会長が赤崎記念研究館を見学

豊田章一郎トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長が、4月3日(火)、本学を訪問し、赤崎記念研究館を視察しました。

同研究館は、高輝度青色発光ダイオードを世界に先駆けて実現した赤崎 勇本学特別教授の研究業績を称えるとともに、学術創生の重要性を後世に伝え、本学における独創的かつ先進的な科学技術研究を推進する目的で建設されたものです。



視察の様子（左から、平野総長、赤崎特別教授、豊田名誉会長）



視察の様子（手前左から、豊田名誉会長、赤崎特別教授）

豊田名誉会長は、赤崎特別教授の研究業績と青色発光ダイオードの開発過程を解説したパネルや実験装置等の展示物が陳列されている同館1階の展示室を訪れ、赤崎特別教授本人から展示物についての詳細な説明や青色発光ダイオードの研究開発にまつわる話を聞きながら、熱心に見学しました。

見学終了後、赤崎特別教授より、青色発光ダイオードによって輝く豊田講堂時計台の写真を贈呈された豊田名誉会長は、訪問者台帳

に記帳するとともに、「赤崎先生の御研究の歴史を直接御説明いただき改めてその偉大さに感激いたしました」と感想を記しました。

## 平成19年度科学技術分野の文部科学大臣表彰者が決まる

平成19年度文部科学大臣表彰（科学技術分野）受賞者が決定し、本学から4名が受賞しました。

本賞は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めたものについて、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、もって我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的としており、顕著な功績をあげた者を対象とした「科学技術賞」、高度な研究開発能力を有する若手研究者を対象とした「若手科学者賞」、優れた創意工夫により職域における技術の改善向上に貢献した者を対象とした「創意工夫功労者賞」、児童・生徒の創意工夫の育成に顕著な成果をあげた小・中学校を対象とした「創意工夫育成功労学校賞」の各賞に分かれています。

受賞者は右のとおりです。

### ■科学技術賞（研究部門）

受賞者：谷本 正幸工学研究科教授

業績名：「自由視点テレビの研究」

### ■科学技術賞（理解増進部門）

受賞者：高井 吉明工学研究科教授（グループ）

業績名：「リフレッシュ理科教室事業による青少年理科教育の普及啓発」

受賞者：福和 伸夫環境学研究科教授

業績名：「体感型振動実験教材を用いた耐震化の理解増進と防災普及啓発」

### ■若手科学者賞

受賞者：木下 俊則理学研究科准教授

業績名：「植物における青色光及び植物ホルモンのシグナル伝達の研究」

## 愛知血液疾患研究財団からの寄附にかかる目録及び感謝状贈呈式を挙行

財団法人愛知血液疾患研究財団からの寄附にかかる目録及び感謝状贈呈式が、4月9日(月)、本部1号館総長応接室において、挙行されました。

贈呈式には、同財団から、大北 威理事長、齋藤英彦常務理事、神谷 忠常務理事、高松純樹監事、奥村 進事務局長、北村 明前理事長夫人、本学から、平野総長をはじめ



記念撮影の様子

め、杉浦、高橋両理事、濱口医学系研究科長、野間医学部・医学系研究科事務部長が列席しました。

はじめに、大北理事長から総長に寄附目録が贈呈された後、平野総長から感謝状と記念品が贈呈され、お礼のあいさつが述べられました。その後、大北理事長から、血液疾患研究のさらなる発展を期待したいとのあいさつがありました。

同財団は、昭和60年10月に「愛知県において血液疾患に関する調査研究及びその助成を行うとともに、血液疾患に関する知識の普及啓発その他の事業を行い、血液疾患の確な診断、早期発見及び予防、治療方針の確立並びに血液疾患の患者に対する福祉の増進を図り、もって公衆衛生及び社会福祉の向上に資すること」を目的として設立され、これまで、東海・北陸の医療機関と各種事業を展開し、多くの成果を挙げ、本学に多大な研究助成等を行っていただきました。

今般、同財団解散に伴う1.7億円の残余資産の活用方法についての検討の中で、財団の設立目的を遂行できる機関ということで本学が選ばれたということであり、同財団の期待に応えるべく気持ちを新たにしているところです。

## 二村医学系研究科教授への感謝状贈呈式を挙行

本学柔道部の部長兼師範である二村雄次医学系研究科教授（現名誉教授）への感謝状贈呈式が、3月27日(火)、本学柔道場において挙行されました。

本贈呈式は、柔道場の畳が永年の使用により磨耗し痛みが激しくなったため、「定年退職を機に40年以上お世話になった道場に恩返しをしたい」と、同教授が畳135枚を購入し、寄贈したことによるものです。

二村教授は、本学在学中、柔道部に所属し主将を、そし

て、教員として教育、研究、診療の傍ら、22年間本学柔道部の部長を務めました。平野総長から感謝状を受け取った同教授は、柔道人口の減少を憂い、今回の寄贈が柔道人口の増加につながれば、と話しました。

贈呈式後は、柔道部員と県内外の中・高校生らが、替えたばかりの真新しい畳の感触を確かめながら合同練習を行い、汗を流しました。



贈呈式の様子



合同練習の様子

## シンポジウム「津波」を開催

シンポジウム「津波～その衝撃と全貌～」が、3月17日（土）、環境総合館レクチャーホールにおいて、災害対策室主催のもと、開催されました。

まず、佐竹健治独立行政法人産業技術総合研究所活断層研究センター副センター長が、津波に関する基礎知識と最新の研究成果について講演を行いました。次に、作家で歴史津波災害研究家でもある山下文男氏が、昭和8年に起こった三陸津波における自身の被災体験も交えて、明治、

昭和の三陸津波災害の実態とその教訓について紹介しました。これらの基調講演で、学術的な観点と具体的な被災体験の両面から、津波災害について幅広く学ぶことができました。

引き続き、2004年のスマトラ沖巨大地震津波で最大の被害を被ったインドネシアのバンダアチエにあるシャクアラ大学から招いた学生、プトゥリさんとナニさんが、安藤雅孝環境学研究科教授との対談形式で津波襲来の衝撃を語り

ました。その後、高橋 誠同研究科助教授、林 能成同研究科助手に会場の参加者が加わり、めったに起こらない津波災害にいかにかに備えるかについて、熱心な議論がありました。

会場は、85名の参加者で一杯になり、盛況のうちに終了しました。



基調講演をする山下氏



絵画による津波被災体験の紹介コーナー

# 花の中の秘密を探る

東山 哲也 大学院理学研究科教授

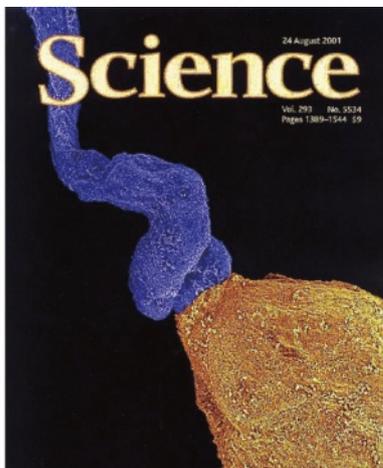
私たちが日ごろ口にしているお米、小麦、大豆といった穀物、これらは全て植物の受精により作られます。植物の受精のしくみを知ることは、我々人類の食糧問題や環境問題などを考えていく上でも非常に重要なことです。しかし、植物の受精の研究は、その長い歴史にも関わらずあまり進んでおりませんでした。その最大の理由は、植物の受精がめしべの奥深くで、まるで神秘的ヴェールにでも覆われるかのように、ひっそりと行われるためです。

私はこの難題に挑むために、25万種を超えるとされる被子植物の中で、最も適した植物を研究材料に選びました。それはトレニア (*Torenia fournieri*) という植物です。普通植物の卵装置は、胚珠 (はいしゅ) という受精前の種子組織の中央にしっかりと埋め込まれています。卵装置を外から観察することも、操作することもできません。しかし、このトレニアでは、卵装置の部分が胚珠の外側に飛び出しているのです。このため、受精過程にある細胞を生きのまま観察し、操作することも可能です。卵装置が露出した植物はいくつかありますが、トレニアはその中でも実験植物としての性質を兼ね備えた、最高の植物と言えます。

トレニアで受精のしくみを解析するには、顕微鏡下で体外受精を行う必要がありました。トレニアの特徴は、実は19世紀後半から知られていま

したが、体外受精系の開発に成功した人はおらず、トレニアは有効に利用されてきませんでした。私は試行錯誤の末に、一度めしべを通った花粉管 (花粉から伸び出す細長い細胞で、卵装置に到達して受精が達成される) を使うと、それまで卵装置に見向きもしなかった花粉管が激しくうねりながら卵装置に誘引されることを発見しました。植物のダイナミックな受精過程を、世界で初めて生きた映像として捉えた瞬間でした。

この体外受精系の確立を突破口として、これまで謎とされた様々な植物の受精のしくみや実際の様子を明らかにしました。その一つとして、150年にわたって多くの研究者が探し求めながら誰も同定に成功していない「花粉管誘引物質」の問題が挙げられます。私はマイクロレーザーで細胞を一つ一つ破壊することにより、確かに花粉管誘引物質が存在し、しかも卵細胞のとなりにある2つの「助細胞」という細胞がこれを分泌していることを明らかにしました。その成果はサイエンス誌の表紙を飾るなど世界的にも注目され、助細胞が分泌する誘引物質探しの競争となっています。我々の研究グループではトレニアの個々の助細胞をピックアップして分子解析することにより、有力候補の同定に成功しました。現在、独自に発明したレーザーマイクロインジェクターなどを用いて、最終的な証明に挑んでいます。



トレニアの花 (左) と、花粉管 (青) と卵装置 (橙) の受精過程を初めて捉えた走査型電子顕微鏡像 (右; *Science* 2001年8月24日号より)

# 資源・環境問題と世代間の衡平性

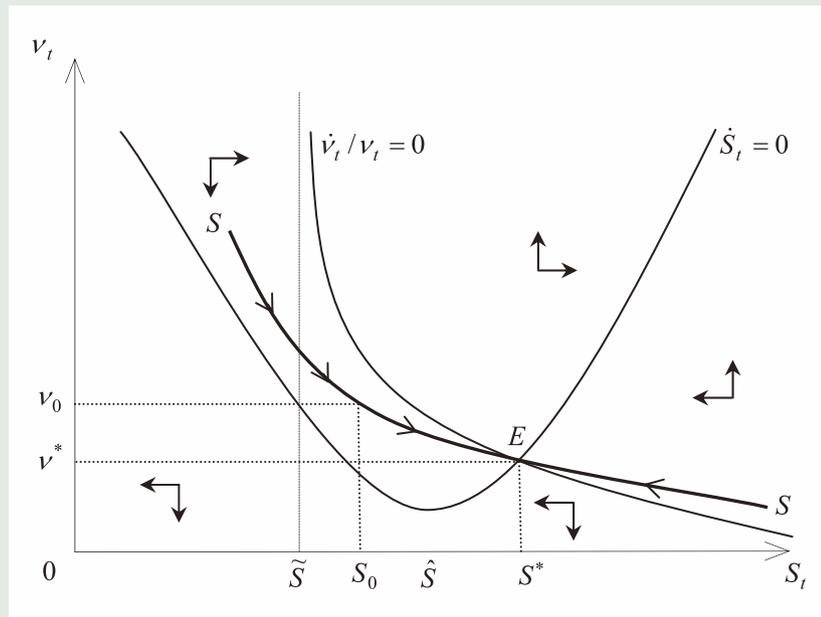
奥村 隆平 大学院経済学研究科教授

資源・環境問題の視点から、現在世代の経済活動をみれば、2つのチャンネルを通じて後の世代に影響を及ぼします。ひとつは、現在ある枯渇性資源や再生可能資源を生産活動において使用し、その量を減少させ、時にはそれを使い尽くすことにより、後の世代の生産と消費に悪影響を及ぼすというものです。もうひとつは、現在世代の経済活動から生み出される廃棄物が周囲の環境を悪化させ、環境アメニティーの観点から後の世代の厚生を低下させるというものです。

後者についていえば、CO<sub>2</sub>の排出が地球を温暖化させ、大きな災厄を招く可能性を指摘したアル・ゴアの映画『不都合な真実』において、いわ

ば極限的なケースが描き出されています。このような重大な指摘がなされているにもかかわらず、世界の経済活動において余り大きな取組上の変化が見られないのは不思議なことといわざるを得ません。世界の大部分の人々は、災厄は起きないか、仮に起きてもずっと将来のことと考えているのかもしれない。

しかしながら、災厄の問題を別にしても資源の利用については少なくとも2つの注意すべき点があります。ひとつは効率性の問題であり、もうひとつは衡平性の問題です。まず、枯渇性資源について考えてみます。効率性の問題というのは、現在から将来にわたって資源が採掘され、生産に利



The Phase Diagram of the Model

用され、やがて枯渇してしまうとすると、各時点でどれだけの量を採掘するのが望ましいかという問題です。望ましさを基準は、現在から将来までの（利子率で割り引かれた）生産物の価値の総和と考えられます。いわば、パイを最も大きくするような生産計画といえます。このときの最適条件は、「ホテリングのルール」です。すなわち、資源価格の上昇率が利子率に等しいというものです。

つぎに、衡平性というのは、各世代の人々が等しく満足を享受できるような生産・消費計画であると考えられます。仮に、生産物が1種類であるとすれば、各時点の一人当たり消費量が一定であるような状態が衡平であるといえます。いわば、パイを平等に分割することに対応します。しかしながら、確実に資源が減少する世界で消費量を一定に保つことは可能でしょうか。「ハートウィックのルール」は、それを可能にする一例をあげています。生産には、資源の投入以外に資本と労働が必要であり、それらは代替可能であるとします。その時、各期の資源投入の売り上げをすべて新しい資本の蓄積にまわせば、消費量が一定の時間経路を得ることができるというものです。以上をまとめると、枯渇性資源の最適管理の問題といえることができます。

さて、枯渇性資源の代表を石油などの化石燃料とすれば、再生可能資源の代表は魚類、森林、清浄な空気というようなものでしょう。再生可能資源の特徴は、再生する資源フローのみ利用してい

けば、存在する資源ストックに手をつけることなく、経済を維持できる点にあります。この状態を定常状態といいます。このような定常状態は多数ありますが、その中から望ましい定常状態を選び出すという問題があります。ひとつの候補は、再生産量が最大になるような資源ストックに対応する定常状態です。これを「ゴールデン・ルール」といいます。もうひとつの候補は、以前にも触れた産出量の割引現在価値を最大にする状態です。これは利子率によって決定され、ゴールデン・ルールよりも小さい資源量になります。さらに、再生可能資源が環境面でのアメニティーを有する場合も考えられます。この場合は、定常的資源ストックがゴールデン・ルールを超える場合もあります。

私たちの研究は、以上のような問題を開放経済という枠組みの中で解明することにあります。その研究の一端を紹介しますと、左ページの図のようになります。ここでは、開放経済を想定し、再生可能資源が環境アメニティーを有する場合に定常状態に至る最適経路の一例が示されています。横軸は、再生可能資源のストック量、縦軸はその価格です。ここで、 $S$ はゴールデン・ルールに対応する資源量、 $S^*$ は定常的資源ストックです。効用の割引現在価値を最大化するような資源の時間経路はSSというサドル・パスになり、定常均衡のE点へ向かいます。この場合、資源がアメニティーを有するため、ゴールデン・ルール以上に資源を保全することが有利になります。

1948年生まれ  
1973年東北大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学  
1996年名古屋大学経済学部教授  
2000年名古屋大学大学院経済学研究科教授  
2005年名古屋大学高等研究院副院長  
経済学博士、日本国際経済学会常任理事、日本経済学会理事  
大事にしている言葉 「試練、恵み、感謝、奉仕」  
趣味 クラシック音楽鑑賞

おくむら りゅうへい



# 平成18年度名古屋大学総長顕彰 受賞者及び受賞団体のことば

平成18年度名古屋大学総長顕彰授与式が、3月23日(金)、シンポジオンホールにおいて行われました。名大トピックス167号では、各受賞者及び団体一覧を掲載しましたが、本号では受賞者及び受賞団体のことばを紹介します。

「学修への取り組み」部門

## 大学院試験への挑戦

溝口 祐司 工学部機械・航空工学科3年

この度は、このような立派な賞をいただくことができ、大変うれしく思っています。

私が所属していた工学部機械・航空工学科では、数人の学生が3年生から大学院に進学できる制度があります。私はその制度を利用して工学研究科に進学しました。3年生の5月



自宅で院試の勉強中

ごろ、大学院入試の受験資格をいただきました。合格するには筆記試験で高得点をとらねばならず条件は厳しかったですが、「試験範囲は3年前期までの内容なので合格のチャンスはある、もし不合格になったとしても良い経験になる」と思い、挑戦することを決めました。普段の授業や学生実験、定期試験などで忙しい中でしたが、計画を立てて勉強を進めました。例えば、私は自宅から電車で通学していますが、その片道約40分の乗車時間を有効利用して試験範囲の内容を復習しました。夏休みに入ってから、1日2科目ずつ過去問を解くという計画を立て、集中的に勉強を進めました。その結果、大学院入試に合格することができました。合格通知をいただいたときは大きな達成感を感じました。

私がこの4月から所属する大日方研究室では、身体運動の解析や、福祉機器の開発、ロボットマニピュレータの応用などを研究しています。研究内容には、リハビリテーションや生活支援に役立つものもあります。私には寝たきりの祖母がいたので、高齢化社会ではこうした研究が必要であると考え、この研究室を選びました。私自身の研究テーマは現在検討中ですが、今回の受賞を励みにして、これからの研究に励んでいきたいと思えます。

「学修への取り組み」部門

## 日々の努力と新しい研究課題への挑戦

水本 有紀 農学部資源生物環境学科4年

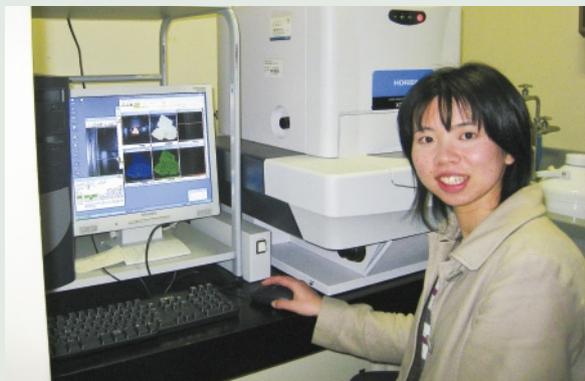
今回、私の4年間の大学生活を総長顕彰という形で評価していただき、大変光栄に思います。

私の大学生活は、学修に対して毎日こつこつと取り組み続けた4年間でした。勉学を疎かにしたくはなかったので、どの講義も真剣に受け、すべての講義で遅刻や欠席は一度もし

ませんでした。また、通学に2時間半かかっていたので、時間を有意義に使うように心がけ、通学時間を利用して復習やレポートに取り組むなど、習ったことはその日のうちに理解するよう努めてきました。このように学修に対して日々の努力を積み重ねていったことで、結果を出すことができたのだと思えます。

卒業研究では、植物が根から水を放出する現象に注目し、植物を灌漑手段として利用できないかと考えて研究を行いました。担当教員に熱心に指導していただき、試行錯誤を繰り返して実験を行った結果、水放出能力が予想以上に高い植物種を発見することができました。そして、この結果を学会で発表し、植物の新しい利用価値の可能性を提示することができました。

4月からは農業に関わる仕事に就きます。この4年間で、食と農に対して自然科学的な面からだけでなく、社会学・経済学的な面などさまざまな面から考える力を養うことができました。また、これまでになかった新しい研究課題に取り組んだことで、常識にとらわれず柔軟に考えることの大切さを学びました。日本の農業は今厳しい状況ですが、今回の受賞に恥じぬよう、大学で学んだことを活かして、農業の活性化を通じて社会に貢献できるよう頑張りたいと思えます。



X線分析顕微鏡を用いてのサンプル解析

「正課外活動への取り組み」部門／団体  
社会貢献活動分野

## 学生発信の防災とは

震災ガーディアンズ

西村 健 工学部社会環境工学科4年

私たち震災ガーディアンズが発足したのは、名古屋でも東海地震の被害に着目され始めた2003年でした。当時は地震や防災と言っても、あまり身近に感じる人は少なかったと思います。それから新潟中越地震やスマトラ沖地震、最近では能登地震と地震が起こるたびに防災に注目が集まるようになり



名古屋駅から名古屋大学までの9kmを歩く帰宅困難者体験イベントの参加者ら（06年7月2日）

ました。

これまでの防災啓発は主に過去の被害を伝えて「おどす」手法がとられてきましたが、自分も同様な被害に遭うかもしれない、という実感をわかせることは難しいのではないかと思います。そこで私たちは、過去の災害の被害を伝えるのではなく教訓を伝えられないかと考え、「震災シミュレーションゲーム」を開発しました。これは地震発生前後を想定したすごろくで、現在までに5種類を開発しています。ゲームによって、気軽にできるもの、参加者に考えさせるものなどの特色を付けてあります。気軽なものは小学生向けセミナーやイベントに出展する際などに使用しています。最近では全国から問い合わせがあり、ゲームの貸し出しも始めました。

私たちは活動を通して、様々な人たちと出会う機会があります。セミナーやイベントの参加者、共に企画を立ち上げるスタッフとして、シニアの方から小学生まで、普段の大学生としての生活をしているだけではこんなにたくさんの人たちと出会えなかったと思います。また、活動を続けている上で、社会からの学生への期待の高まりを大きく感じました。今年もまた新たな企画を立ち上げ、活発に活動を続けていきたいと思っています。震災ガーディアンズのホームページ：<http://www.shinsai.jpn.org/>

# 大学のためのコミュニティシステム

皆さんは SNS をご存知でしょうか？言葉は聞いた事が無くても、mixi などのサービスを利用している方は多いのではないかと思います。SNS (Social Networking Service) は人と人とのつながりを利用してコミュニケーションを支援するシステムやサービスのことで、近年利用者が急増しています。

私は、この SNS を大学内のコミュニケーション促進や情報発信の場として利用できないか、という研究を行っています。その一環として、アカデミック・コミュニティ・システム (ACS: Academic Community System) と呼ばれる名古屋大学の SNS を構築・運用しています。

ACS は情報科学研究科教育研究特別経費の支援を受けて開発が行われ、mixi など従来の SNS には無い機能・特徴を備えています。特に、情報の発信先を細かくコントロールすることで、情報を見せたい人に対して情報を発信できるようになっています。例えば学生の場合、研究室では研究活動をしつつ、学生仲間とサークル活動を行うなど大学内で様々な活動を行います。ACS では、



ACS-PDS (情報端末) と筆者

たかい かずき  
1983年12月7日生まれ  
岐阜県出身



ACS のホームページ

研究に関する投稿は研究室の先生にのみ公開し、サークルの連絡事項などの投稿はサークルの仲間だけに公開することができます。情報を適切にコントロールすることによって、一つのシステム (ACS) 上で大学内の多様な活動を支援できるようになっています。

また、ACS-PDS というシステムも開発しています。このシステムは、ACS 上に投稿された記事を取得してキオスク端末などの画面上に表示するシステムです。このシステムを利用すると、ACS を学内の電子掲示板として利用することができます。20台程度を学内各所に設置する予定です。

様々な機能が盛り込まれている ACS ですが、利用者がまだまだ少ないのが現状です。これは ACS のパフォーマンスにも原因があると考えています。同時に60名ほどが利用するとページの表示に時間がかかるなど、ユーザの使い勝手の面では様々な課題が残っています。今までもチューニングを行うなどの工夫はしていますが、今後さらに改善を進めてより多くの方に ACS を利用していただきたいと思っています。

ACS は名古屋大学の構成員の方なら、全学 ID とパスワードを利用することで誰でも利用できます。情報共有や情報発信のための様々な機能が組み込まれていますので、ぜひ利用していただきたいと思っています。より多くの方が利用し、情報を共有することで、ACS はさらに便利に発展していきます。皆さんのご利用をお待ちしています。

ACS のホームページ : <http://acs.is.nagoya-u.ac.jp>

## 「アートキッズ'07」を開催

●大学院文学研究科

大学院文学研究科は、3月27日(火)、こども美術鑑賞教育プログラム「アートキッズ'07」を開催しました。これは、文学研究科で主に美術史学を専攻する大学院学生を対象として開講された大学院授業「美術教育の理論と実践」の半年間の学習・研究の集大成として、小学3、4年生を対象としたレクチャー及びワークショップを行ったもので、昨



ワークショップで制作した作品を手にする参加者

年度に引き続き2度目の開催となりました。今回は、見付、伊勝小学校等から11名の参加がありました。

「いろがうたう かたちがおどる」と題し、絵画と音楽をテーマにした今回のプログラムは、テーマ設定から実施、広報に至るまでほとんど全てを4名の大学院学生が行いました。また、プログラムの作成に際して、美術教育コーディネータの伊藤優子氏より美術鑑賞教育の理論や現状、実際のプログラムの組み立て方について等、多くの示唆を受けました。

来年度以降も美術鑑賞教育の可能性を探るため、このような取り組みを意欲的に進めていく予定です。

## 台湾国立成功大学文学院学術文化交流訪日団が文学研究科を視察

大学院文学研究科は、4月4日(水)、台湾国立成功大学文学院の張 高評文学院院长をはじめとする学術文化交流訪日団13名の訪問を受けました。

訪日団は、日本のトップクラスの大学との学術文化交流を深めるために来日し、本学の他に大阪大学、京都大学及び早稲田大学の視察を予定していました。



概要説明を受ける訪日団一行（左側）

一行は、同研究科会議室において、町田文学研究科長、森 正夫名誉教授（元副総長）らとあいさつ及び自己紹介を行った後、本学及び同研究科の概要等について説明を受け、法人化された大学の管理運営等を中心に質疑応答が行われました。

引き続き、各専門分野に分かれて懇談し、教員及び研究者との交流、共同研究活動、シンポジウム等、今後の取り組みについて熱心に情報交換が行われました。

今回の訪問によって、両大学における更なる学術文化交流の進展が図られるとともに、学術交流協定締結に向けた第一歩となることが期待されています。

## 平成19年度教育学部附属学校入学式を挙

平成19年度名古屋大学教育学部附属学校入学式が、4月6日(金)、附属学校第1体育館において、杉山、高橋両理事、寺田教育学部長、筏井幸夫 PTA 会長、高味修一同窓会会長を来賓に迎えて行われました。

まず、入学式に先立ち、植田健男教育発達科学研究科教授の校長着任式が行われました。



入学式で式辞を述べる植田校長

式典では、附属中・高等学校の代表生徒30名、附属中・高等学校教職員、保護者約300名が見守る中を、中学校新入生79名、高等学校新入生120名が晴れやかな表情で入場しました。新入生全員の氏名称呼の後、植田校長から入学者への激励の言葉があり、教育基本法にふれて「教育は人格の完成にある」と式辞が述べられました。次に、杉山理事、寺田教育学部長、筏井 PTA 会長の祝辞があり、続いて在学生からの祝辞がありました。その後、新入生の答辞として、中学1年生の本山さんが「色々な方と交流して心豊かな人間に成長していけるよう努力していきます」と、高校1年生の佐伯さんが「何事にも挑戦し実行することで将来の夢を具体的に見つきたい」と、学校生活への抱負述べ、厳粛で心のこもった入学式となりました。

## ベトナムで日本法教育研究センター準備室の開所式を挙

●大学院法学研究科

大学院法学研究科は、3月9日(金)、ベトナム ハノイ法科大学会議室において、日本法教育研究センター事務室の開所式を挙行しました。

これは同研究科が10年前から進めてきた「法整備支援－人材教育支援－」の一環として現地の法学部の学生に対して日本語で日本法を教えるため、ウズベキスタン、モンゴ

ルに次ぐ3つ目のセンターとしてベトナムに設置する同センターの開所準備のため設置するものです。

開所式には、文部科学省から下敷領強国立大学法人支援課長補佐等、法務省から藤田正人大臣官房司法法制部検事、本学から、佐分理事、松浦同研究科長、鮎京法政国際教育協力研究センター長等11名、また、他大学から3名、総勢21名が参加しました。また、現地からは、ハノイ法科大学からレミン タム学長を筆頭に各学科長等大学関係者、司法省人事局副局长、日本大使館書記官、日本人商工会関係者、日本人材センター関係者、JICA 法整備支援専門家等30余名が出席しました。

鮎京センター長の司会で進められた式典では、ブー ヴァン タム司法省人事局副局长、タム学長らから、法科大学の中に設けられる同センターへの大きな喜びと期待が述べられ、橋本和也日本大使館書記官、下敷文部科学省課長補佐らから、祝辞があり、式典後には、看板の除幕を行い、事務室の開所を祝いました。

なお、10日(土)には、ハノイ市内で同研究科の同窓会が行われ、ロン司法省国際局副局长をはじめ20名の同窓生が賑やかに指導教員らと親交を深めました。



開所式の様子

## UCLA との工学部協定締結記念国際シンポジウムを開催

●大学院工学研究科

大学院工学研究科は、3月26日(月)、27日(火)、野依記念学術交流館において、同研究科とUCLA(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)工学・応用科学部との学術交流協定の締結を記念して、シンポジウムを開催しました。

平野総長による開会のあいさつの後、シンポジウムの開催に先立ち、澤木工学研究科長及びビジャイ ディア UCLA 工学・応用科学部長により、学術交流協定の署名式を執り行いました。

シンポジウムのテーマは、「マイクロ・ナノメカトロニクスが拓く未来生体医工学」であり、UCLA からチンミン ホー教授、チャンジン キム教授、ローレント ピロン助教授、エリック ペイユ チョウ助教授の4名による講演と3名の学生によるポスター発表、工学研究科から、生田幸士教授、高井 治教授、福田敏男教授、馬場嘉信教授、本多裕之教授の講演と9件のポスター発表を行いました。また、UCLA と本学、それぞれの研究室を紹介するブースを開

設し、学生も交えて両大学の交流を深めました。今回のシンポジウムは、生田教授とホー教授により企画されたものですが、学術交流を有効かつより緊密にしていくため、今後も継続的にシンポジウムを開催することが両者の間で確認されました。



握手するビジャイ ディア部長(左)と澤木研究科長(右)



学術交流協定締結後の記念写真

## 小型シンクロトロン光研究センターの看板上掲式を挙

小型シンクロトロン光研究センターは、4月9日(月)、工学部8号館南玄関において、本年4月1日付けで学内共同教育研究施設として設置された同センターの看板上掲式を挙りました。

同センターは、本学の立案による平成21年度に完成予定の小型シンクロトロン光施設の設計と運営及び研究推進の

母体となるもので、同施設は、「光科学ナノファクトリー計画」を基礎として、愛知県、産業界、大学、研究機関が一体となって、地域密着型で、基礎研究は勿論、開発研究から産業応用まで「ものづくり」、「ナノ」の中心となる施設です。

上掲式には、学内から、平野総長をはじめ、各理事、監事、小野木工学研究科長、澤木前工学研究科長等が、学外から、独立行政法人科学技術振興機構 JST イノベーションプラザ東海の丸勢 進館長(本学名誉教授)が列席しました。

はじめに、竹田同センター長から、同センターの設置経緯と役割について報告があった後、平野総長からセンターへ期待を込めたメッセージが送られました。引き続き、関係者による看板の上掲が行われ、式典は無事終了しました。



看板を掲げる総長(左)と竹田センター長(右)

## 「第4回モノづくり市民公開講座」を開催

●大学院工学研究科

大学院工学研究科創造工学センターは、3月26日(月)、IB電子情報館10階にある同センター内において、「第4回モノづくり市民公開講座」を開催しました。

同公開講座は、学生を対象とする「モノづくり講座」の一部を2年前から一般市民(中学生以上)にも公開しているもので、十代半ばの若い世代に金属加工を体験しながら



参加者による記念撮影

モノづくりの楽しさ、難しさを知ってもらうとともに、一般市民の方にも本学に親んでもらうことを大きな目的としています。

まず、佐藤創造工学センター長が「材料加工学入門」と題して、生活に身近な金属製品の加工法についてミニ講義をした後、参加者が自分で考えたデザインを基に、1枚のはがき大の銅板を素材として金属モビールの作品づくりに挑戦しました。参加者1人1人に技術職員が付き添い、工具を安全に使いこなす方法を教え、金属の性質を生かした光沢ある曲線、パンチの刻印をつなげた絵柄の装飾など、個性のある作品が半日の作業で出来上がりました。最後に全員でお互いの作品を鑑賞し、それぞれ作品を持ち帰りました。

中学生、主婦など合計11名の参加があり、「金属加工が楽しかった」、「名古屋大学に親しみが持てた」、「再度挑戦してみたい」など好評で、特に若い世代にモノづくり体験を、と願う主催者の期待に応えてくれました。

## チュラロンコン大学による実地研修を受け入れ

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、3月5日(月)から11日(日)にかけて、タイ王国 王立チュラロンコン大学大学院国際プログラムビジネス経済専攻の教職員4名、学生18名による日本での実地研修を受け入れました。この研修は、中部地方にある製造業の企業の事例研究を目的としており、今回は、平成15年3月の受け入れに続いて2度目となります。



ミツカン工場訪問の記念撮影

5日、一行は、歓迎式に臨んだ後、新海尚子同研究科助教授による「日本の経済現況」と題する講義を受けました。6日から8日にかけては、大坪 滋同研究科教授及び新海助教授の引率によって、リンナイ大口工場、三菱製作所工場、半田市のミツカン工場を見学しました。これらの企業はタイ国にも工場を持ち、学生達は既にタイ国内の工場を調査しているので、いずれの工場でも見学後に活発な質疑応答が行われました。9日、10日は、JRセントラルタワーズ等、名古屋市の商業地区を視察し、11日に帰国しました。

同研究科では、1992年以来毎年、開発途上国で海外実地研修を行っています。チュラロンコン大学の同ビジネス経済専攻はこれまでに5回現地カウンターパートを引き受けています。今回の研修受け入れは、このような教育面での相互交流の一環となっています。

## 平野総長が地球水循環研究センターを視察

平野総長が、4月12日(木)、地球水循環研究センターを視察しました。

まず、上田同センター長から、全国共同利用施設としてのセンターの役割や、昨年9月に開催されたホームカミングデーでセンターの研究活動として展示した、台風の数値シミュレーションと海洋研究におけるブイ、また、今秋に設置予定の「水循環観測マルチパラメータレーダシステム」について詳細な説明がありました。マルチパラメータレーダシステムとは、全国の共同研究者と共同で、降水シ

ステムの3次元気流構造と降水特性の3次元分布等を連続的に観測し、観測データを実時間でホスト計算機に集約させることにより、降水システムの水循環特性を解析・解明する画期的なシステムで、平成19年度から始まる「地球気候系の診断にかかわるバーチャルラボラトリーの形成」プロジェクトにおける主要観測装置として使用されます。

総長は、同センターにおける研究活動の進展への期待と、全国共同利用施設としての役割やその方向性についての意見を述べ、引き続き、上田センター長から「マルチパラ

メータレーダ」の設置箇所や今年度施工予定のセンター本館の耐震補強工事に伴う関連工事等について、詳細な説明を受けながら、センターの建物内外を順次視察しました。



センターの概要等について説明する上田センター長(左)と総長(右)



センター本館屋上にて「マルチパラメータレーダシステム」を視察

## ICCAE 2006年度第8、9、10回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センターは、2月27日(火)、3月22日(木)、27日(火)、第8、9、10回オープンセミナーを開催しました。

第8回は、安達英彦氏(研究機関研究員)が、第9回は、小山 修客員教授(国際農林水産業研究センター研究戦略調査室長)が、第10回は、エバンス アテラ客員研究員(ケ

ニア ビクトリア湖流域開発公社研究員)がそれぞれ講師をつとめ、サブサハラ・アフリカ諸国の食生活パターンは米、トウモロコシ、ミレット・ソルガム、キャッサバ・ヤムなどのイモ類など主食作物によって5類型に分けられ、ケニアでは輸出用花卉や野菜の生産が伸びていて、国内市場の開拓と付加価値の付加技術が重要であることが指摘にされたり、また、SWOT分析により同センターの今後のあり方について提言や、ケニアのネリカの重要な雑草について研究レビューの紹介など、同センターで行った研究成果の発表をしました。

毎回約20名の学生、教員、留学生が参加し、農学国際教育協力のあり方について熱心に討議し、大きな啓発を受ける機会となりました。



質問に耳を傾けるエバンス アテラ客員研究員



## 私の起点 バーミヤンの仏教遺跡

宮治 昭 大学院文学研究科教授

定年1年前に退職することになりましたが、名誉教授の称号を頂くことになり感謝に堪えません。昭和47年4月より5年間文学部助手、昭和60年4月より22年間、同助教授および教授として名古屋大学にお世話になりました。

私の専門は美術史学で、特にインド・中央アジアの仏教美術を中心に研究教育に携わりました。大学院および助手時代に破壊前のアフガニスタン・バーミヤン大仏・遺跡の調査に参加する機会を得、その時の感動が私の仏教美術研究の出発点となりました。名古屋大学は総合大学で、学問の自由と交流の雰囲気溢れていたことは、大変有難いことだったと今にして思います。美学美術史学研究室の院生・学生はもとより、先輩たちも研究室によく来て雑談し、印度哲学（現インド文化学）の先生や院生、工

学部建築史学の先生や院生とも交流をもてたことは、私の研究に大きな幅をもたせてくれました。科研等によって20年近く、毎年のようにインド・パキスタン・中国の仏教美術の調査が出来たことも多くの方々の協力・支援の賜物と感謝しています。

近年の大きな改革で、大学全体が慌しくなり、目先の成果にとらわれて基礎学問がややもすると軽視されがちなのが気になります。総合大学とは言っても理系の比重の大きい本学に、バランスのとれた真の総合大学としての発展を心より祈念します。



## 「二足のわらじ」を履き替えて

加藤 雅信 大学院法学研究科教授

懐かしい多くのゼミ卒業生や、大学院での指導生達とのフェアウェルパーティも終え、この度30年余を過ごした名古屋の地を去ることになった。

これまで、二足のわらじを履いていると評されながら、民法と法社会学・法人類学とを研究してきたが、不当利得研究（『財産法の体系と不当利得法の構造』）が私の東大時代を代表するものとしたら、名古屋大時代を代表するものは「所有・契約・社会」をテーマとした法社会学・法人類学研究であろう。世界各地の狩猟採集社会、遊牧社会を歩いての「所有権」概念発生の社会構造の探求、世界22カ国で開催した契約遵守意識の実証的比較研究、いずれも、興味深い結果を世に問えたと思う。

また、民法研究も、昨年『新民法大系』の5冊目（財産法編の最終巻）を脱稿し、峠は越えた。もちろん、

これからも、現在大問題となっている財産法改正の改正案の作成作業、家族法の執筆という仕事は残っている。ただ、既刊の財産法の部分は、新判例や新論稿に対応した改訂は行うとしても、このままでは大きな飛躍をとげることは難しい。

こう考えた私は、還暦を機に、これまでの二足のわらじを一足にまとめ、法律学研究と法曹実務という二足のわらじに履き替えることとした。実務の経験から、これまでの研究を外から揺さぶろうというもくろみである。4月からは上智大学での研究教育が、秋からはアンダーソン・毛利・友常法律事務所での渉外弁護士としての生活が始まる。文字どおり60の手習い、どういう結果となるかは分からないのではあるが……。

## 役員等

総長	平野 眞一
理事（財務・学術情報関係担当）・副総長	大峯 巖
理事（人事・労務関係担当）・副総長	佐分 晴夫
理事（病院・施設整備・環境安全関係担当）・副総長	杉浦 康夫
理事（教育関係担当）・副総長	杉山 寛行
理事（研究・国際交流関係担当）・副総長	山本 進一
理事（総務・事務総括関係担当）・事務局長	高橋 誠
理事（法務関係担当）	林 光佑 <sup>†</sup>

## 経営協議会委員

## 学外委員

(独)農林漁業信用基金副理事長	加藤 鐵夫
お茶の水女子大学学長	郷 通子
(財)長寿科学振興財団理事長	小林 秀資
トヨタ自動車(株)相談役、(株)デンソー取締役副会長	齋藤 明彦
東レ(株)代表取締役社長	榊原 定征
日本ガイシ(株)代表取締役会長	柴田 昌治
(株)ナゴヤドーム 副社長	角田 牛夫
伊藤忠商事(株)取締役会長	丹羽宇一郎
南山大学学長	ハス ユーゲン・マルクス

(五十音順)

## 教育研究評議会評議員

総長	平野 眞一
理事	大峯 巖
理事	杉山 寛行
理事	山本 進一
文学研究科長	町田 健
教育発達科学研究科長	寺田 盛紀
法学研究科長	松浦 好治
経済学研究科長	荒山 裕行
情報文化学部長	佐野 充
理学研究科長	近藤 孝男
医学系研究科長	濱口 道成
工学研究科長	小野木克明
生命農学研究科長	松田 幹
国際開発研究科長	西村 美彦
多元数理科学研究科長	金銅 誠之
国際言語文化研究科長	吉村 正和
環境学研究科長	林 良嗣
情報科学研究科長	古賀 申明
環境医学研究所長	児玉 逸雄
太陽地球環境研究所長	藤井 良一
エコトピア科学研究科長	松井 恒雄
附属図書館長	伊藤 義人

副総長（産学官連携関係担当）	宮田 隆司
副総長（評価・総合企画関係担当）	松下 裕秀
参与	奥村 洋彦 <sup>†</sup>
参与	金田 新 <sup>†</sup>
参与	中村 利雄 <sup>†</sup>
監事	木村 洋一
監事	湯本 秀之 <sup>†</sup>

<sup>†</sup>印は非常勤

## 学内委員

総長	平野 眞一
理事	大峯 巖
理事	佐分 晴夫
理事	杉浦 康夫
理事	杉山 寛行
理事	山本 進一
理事	高橋 誠
医学部附属病院長	松尾 清一
附属図書館長	伊藤 義人

医学部附属病院長	松尾 清一
総合保健体育科学センター長	島岡 清
文学研究科	和田 壽弘
教育発達科学研究科	氏家 達夫
法学研究科	市橋 克哉
経済学研究科	金井 雄一
理学研究科	大島 隆義
医学系研究科	河村 守雄
工学研究科	鈴置 保雄
生命農学研究科	服部 重昭
国際開発研究科	大室 剛志
多元数理科学研究科	庄司 俊明
国際言語文化研究科	前野みち子
環境学研究科	神沢 博
情報科学研究科	大西 昇
教育研究共同施設連合選出	石田 幸男
教育研究共同施設連合選出	小林 迪弘
評議会選出	佐藤 彰一
評議会選出	濱田 道代
評議会選出	高橋 雅英
評議会選出	足立 守

総長補佐

財務担当	木村 彰吾
人事労務・人権（苦情処理）担当	和田 肇
男女共同参画担当	束村 博子
人権（セクハラ）担当	村瀬 聡美
鶴舞地区担当	室原 豊明
施設整備担当	谷口 元
労働安全担当	山根 隆
教育担当	山本 一良
教育担当（研究推進担当兼務）	周藤 芳幸

部局長等

本部		
事務局	事務局長	高橋 誠
総務部	総務部長	岩川 雅士
	総務課長	神谷 考司
	秘書課長	服部 幸博
	人事労務課長	原 健四郎
	人事主幹	藤井 昭彦
財務部	財務部長	松川 誠司
	財務課長	松本 歩
	財務調整主幹	後藤 隆文
	経理・資産管理課長	樋口 博則
	契約課長	金澤 正雄
	情報企画課長	多田 正和
研究協力・国際部	研究協力・国際部長	成瀬 量
	研究支援課長	浅見 宏信
	社会連携課長	石代 真敏
	国際課長	本村 宏明
施設管理部	施設管理部長	山口 博行
	施設企画課長	須崎 茂弘
	施設整備課長	細野 俊治
	施設管理課長	加藤 好孝
学務部	学務部長	茶畠 豊
	学務企画課長	杉森 伸平
	学生総合支援課長	高橋神奈男
	入試課長	磯部 剛利

国際連携担当	早川 操
研究推進担当	財満 鎮明
研究推進担当（教育担当兼務）	周藤 芳幸
研究・教育支援担当	中村 新男
法務担当	本間 靖規
産学官連携担当	大日方五郎
産学官連携担当	太田美智男
社会連携・社会貢献担当	戸田山和久

運営支援組織	産学官連携推進本部長	宮田 隆司
	産学官連携推進本部連携推進部長	武田 穰
	産学官連携推進本部知的財産部長	笠原久美雄
	産学官連携推進本部起業推進部長	渡邊 明彦
	国際交流協力推進本部長	山本 進一
	国際交流協力推進本部国際企画室長	早川 操
	情報連携統括本部長	大峯 巖
	情報連携統括本部副本部長	阿草 清滋
	情報連携統括本部情報戦略室長	坂部 俊樹
	環境安全衛生推進本部長	杉浦 康夫
	環境安全衛生推進本部環境安全衛生推進室長	山根 隆
	環境安全衛生推進本部環境安全衛生管理室長	山根 隆
	施設計画推進室長	谷口 元
	核燃料管理施設長	山根 義宏
	評価企画室長	松下 裕秀
	セクシュアル・ハラスメント相談所長	近藤 孝晴
	社会連携推進室長	戸田山和久
	災害対策室長	鈴木 康弘
	国際学術コンソーシアム推進室長	野水 勉

監査室	監査室長	佐分 晴夫
-----	------	-------

教養教育院	教養教育院長	若尾 祐司
高等研究院	高等研究院長	近藤 孝男

文学部・文学研究科	文学研究科長・文学部長	町田 健	
教育学部・教育発達科学研究科	教育発達科学研究科長・教育学部長	寺田 盛紀	
	附属中学校長	植田 健男	
	附属高等学校長	植田 健男	
法学部・法学研究科	法学研究科長・法学部長	松浦 好治	
経済学部・経済学研究科	経済学研究科長・経済学部長	荒山 裕行	
	附属国際経済政策研究センター長	高桑宗右エ門	
文系事務部	事務部長	青山 生修	
	総務課長	柳 育夫	
	経理課長	土井 悟	
	教務課長	杉浦 克博	
情報文化学部	情報文化学部長	佐野 充	
	情報文化学部・情報科学研究科事務長	伊藤 正彦	
理学部・理学研究科	理学研究科長・理学部長	近藤 孝男	
	附属臨海実験所長	澤田 均	
	附属南半球宇宙観測センター長	福井 康雄	
	附属構造生物学研究センター長	前田雄一郎	
	理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務長	森本 正廣	
医学部・医学系研究科	医学系研究科長・医学部長	濱口 道成	
	附属医学教育研究支援センター長	太田美智男	
	附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長	高橋 雅英	
	附属病院長	松尾 清一	
	大幸医療センター長	濱島 信之	
	医学部・医学系研究科事務部長	野間 省二	
	事務部次長	青山 正晴	
	事務部次長	根津 郁夫	
	総務課長	伊藤 健一	
	人事労務主幹	野村 重信	
	学務課長	中村 平	
	経営企画課長	谷口 哲也	
	調達課長	松倉 有三	
	医事課長	大岩 淳一	
	包括評価主幹	野口 信子	
	工学部・工学研究科	工学研究科長・工学部長	小野木克明
		附属プラズマナノ工学研究センター長	鈴置 保雄
		工学部・工学研究科事務部長	位田 敏夫
		総務課長	松永 和雄
経理課長		岡田 秀	
教務課長		浅田 貞彦	
農学部・生命農学研究科		生命農学研究科長・農学部長	松田 幹
	附属農場長	柳沼 利信	
	附属演習林長	柴田 叡弼	
	附属山地畜産実験実習施設長	福田 勝洋	
	附属鳥類バイオサイエンス研究センター長	島田 清司	
	農学部・生命農学研究科事務長	社本 好由	

総合保健体育科学センター	総合保健体育科学センター長	島岡 清
国際開発研究科	国際開発研究科長	西村 美彦
多元数理科学研究科	多元数理科学研究科長	金銅 誠之
国際言語文化研究科	国際言語文化研究科長	吉村 正和
環境学研究科	環境学研究科長	林 良嗣
	附属地震火山・防災研究センター長	山田 功夫
	附属交通・都市国際研究センター長	日比野高士
	環境学研究科・地球水循環研究センター事務長	山本 明博
情報科学研究科	情報科学研究科長	古賀 伸明
	附属組込みシステム研究センター長	高田 広章
環境医学研究所	環境医学研究所長	児玉 逸雄
	附属近未来環境シミュレーションセンター長	児玉 逸雄
太陽地球環境研究所	太陽地球環境研究所長	藤井 良一
	附属ジオスペース研究センター長	小島 正宜
エコトピア科学研究所	エコトピア科学研究所長	松井 恒雄
研究所事務部	事務部長	横田 圭介
	総務課長	松岡真一郎
	経理課長	井沢 文雄
附属図書館	附属図書館長	伊藤 義人
	医学部分館長	高松 純樹
	研究開発室長	伊藤 義人
	附属図書館事務部長	川瀬 正幸
	情報管理課長	牧村 正史
	情報サービス課長	中井えり子
	情報システム課長	渡邊 俊彦
地球水循環研究センター	地球水循環研究センター長	上田 博
情報連携基盤センター	情報連携基盤センター長	渡邊 豊英
	情報連携基盤センター事務長	虎澤 千恵
学内共同教育研究施設等	アイソトープ総合センター長	饗場 弘二
	遺伝子実験施設長	石浦 正寛
	留学生センター長	石田 幸男
	物質科学国際研究センター長	巽 和行
	高等教育研究センター長	戸田山和久
	農学国際教育協力研究センター長	山内 章
	年代測定総合研究センター長	中村 俊夫
	博物館長	西川 輝昭
	発達心理精神科学教育研究センター長	森田美弥子
	法政国際教育協力研究センター長	鮎京 正訓
	生物機能開発利用研究センター長	小林 迪弘
	情報メディア教育センター長	山本 一良
	小型シンクロトン光研究センター長	竹田 美和
大学文書資料室長	羽賀 祥二	
学生相談総合センター長	鈴木 國文	
留学生相談室長	松浦まち子	
全学技術センター	全学技術センター長	山本 進一

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
1 診療報酬改定でし寄せ：医学部附属病院では看護師確保のために体験会や説明会の回数を増やし、ほぼ定員を満たした	3.16 (金)	中日 (朝刊)
2 朝日カルチャーセンター：「縄文の暮らしとマツリ」山本直人・文学研究科教授、シンポジウム「高齢社会の認知症」井口昭久・医学系研究科教授「認知症の今」と題し講演	3.16 (金) 3.30 (金)	朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
3 名古屋市美術館学芸員・岩瀬彰利氏・文学研究科学生 貝塚研究に意気込み	3.17 (土)	中日 (夕刊)
4 本学などの大学病院と刈谷豊田総合病院は連携して手術画像を高速通信網で送受信し、手術ノウハウを提供し合う「手術室遠隔医療支援システム」の構築を始めた	3.18 (日)	中日 (朝刊)
5 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 立体の蓮マンダラ 花卉が開閉できる	3.18 (日)	中日 (朝刊)
6 「模擬裁判対抗戦」17日開催：菊池令比等さん・本学大学院生「法律知識のない証人に分かりやすく質問する能力が必要だとわかった」と語る	3.18 (日)	読売
7 漂う博士：理学部で学んだ県立鳥取東高校・種紀彦教諭 研究者希望だったが先輩の苦勞を見て教諭の道を選ぶ	3.18 (日)	読売
8 第44回読売農学賞 山木昭平・生命農学研究科教授 「果実の糖集積・品質向上機構に関する生理・生化学的研究」	3.19 (月)	読売
9 素粒子ニュートリノの謎の解明には、丹羽公雄・理学研究科教授の検出技術がカギ	3.19 (月)	日刊工業
10 本学では、大学院生に「大学教育法」についての勉強会を組織するという先駆的な試みが始まっている	3.19 (月)	日経 (朝刊)
11 舛名大 (田中周一さん・本学学生) 本場所勝ち越し	3.19 (月) 3.23 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
12 医学部附属病院 医療事故 監視モニター警報がならず不整脈発見遅れる	3.19 (月)	日経 (朝刊) 他4社
13 中日文化センター：特別講座「ジョン・ギャスライトの自然塾—遊びの森&癒やしの森」エコロジスト・ジョン・ギャスライトさん・本学大学院生が講義 「『個人ってなにが違うの?』—ここまで進んだDNA鑑定」山本敏允・医学系研究科助教授が講演	3.19 (月)	中日 (夕刊)
14 ひと・仕事 日本学士院学術奨励賞を受賞した近藤孝弘・教育発達科学研究科助教授 教育と国際政治密接に結びつけ	3.20 (火)	中日 (朝刊)
15 名大サロンの主役：坪井秀人・文学研究科教授 国策が生んだ詩歌	3.20 (火)	中日 (朝刊)
16 「理系白書—シンポジウム in 東京」2月25日開催：東村博子・生命農学研究科助教授「女性を生き活活性化を」	3.20 (火)	毎日 (朝刊)
17 江戸面白本の世界：塩村耕・文学研究科教授 ある奇人の自叙伝 西鶴に影響した生き方	3.20 (火)	中日 (朝刊)
18 訃報：宮原豊・本学名誉教授	3.20 (火)	中日 (朝刊)
19 時日記：高田浩司さん・本学学生 名乗れず…「主夫」はつらいよ	3.20 (火)	中日 (朝刊)
20 「日本原子力学会公開講演・未来の世代が考える2030年の日本のエネルギー・原子力の姿」28日開催：本学工学部にて	3.20 (火)	中日 (夕刊)
21 東海国公立医科系教授18人、31日退官・退職：下方薫・医学系研究科教授、山内一信・医学系研究科教授、二村雄次・医学系研究科教授、井口昭久・医学系研究科教授、鍋島俊隆・医学系研究科教授、菊池韶彦・医学系研究科教授、森尚義・医学系研究科教授	3.21 (水)	読売
22 教育基本法改正テーマに講演会：中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授	3.22 (木)	中日 (朝刊)
23 朝日カルチャーセンター：「ヨーロッパ絵画の図像学」木俣元一・文学研究科教授、「『論語』の味読—人生の智恵」山下龍二・本学名誉教授	3.22 (木)	朝日 (朝刊)
24 「エコアクションミーティング2007」3月31日開催：竹内恒夫・情報学研究科教授がパネリストを務める	3.22 (木) 4. 1 (日)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
25 本学は22日セクシュアルハラスメントにあたる行為をしたとして生命農学研究科の教員を出勤停止15日とする懲戒処分、またアカデミック・ハラスメントの行為があったとして環境学研究科の教員を訓告とすることを決定	3.23 (金) 3.24 (土)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 他4社
26 風向計：家森信善・経済学研究科教授 銀行は「環境融資」の強化	3.23 (金)	読売
27 犬山市教委 全国学力調査不参加決定：教育委員である滝尚史・本学非常勤講師は、「犬山は教育の町というイメージだが政治的な争いになり、外で恥ずかしい思いをしている」と語る	3.23 (金)	朝日 (朝刊)
28 ぱーそん：お茶の水女子大学学長・郷通子・本学名誉教授 理系志望の女子を応援	3.23 (金)	朝日 (夕刊)
29 原爆症認定制度 沢田昭二・本学名誉教授に聞く	3.23 (金)	中日 (夕刊)
30 本学環境学研究科教授 万博開催前にマンモス肉片無断持ち出し	3.24 (土) 3.26 (月) 3.27 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (夕刊) 日経 (朝刊) 読売 毎日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
31 23日本学卒業式 舛名大(田中周一さん・本学学生)も出席	3.23 (金)	中日(夕刊) 朝日(夕刊)
	3.24 (土)	毎日(朝刊)
32 県高校野球春季大会名古屋地区予選 教育学部附属高校5-4 冨田	3.24 (土)	朝日(朝刊)
33 ほとけたちのイメージを探る:宮治昭・文学研究科教授 ほとけたちのパテオン 異文化と交流、摂取して	3.25 (日)	中日(朝刊)
34 案内板:シンポジウム「このままでいいのか全国学力テスト」31日開催:中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授他が議論する	3.25 (日)	朝日(朝刊)
35 06年度の永井科学技術財団賞:財団共同研究奨励金 高磁化力研究グループ:浅井滋生・工学研究科教授、岩井一彦・工学研究科助教授他が受賞	3.26 (月) 3.27 (火)	日刊工業 中日(朝刊)
36 25日の能登半島沖地震について:鷺谷威・環境学研究科附属地震・火山防災研究センター助教授「能登半島はほぼノーマークだった。」と話す 安藤雅孝・環境学研究科附属地震・火山研究センター教授は、今回の地震の被害について「震度だけでは被害ははかれない。」と話す 福和伸夫・環境学研究科教授は、被害が抑えられた原因に強固な地盤だったことを指摘。また、屋根に積雪がなかった点も建物の倒壊を抑えたと分析	3.26 (月)	中日(朝刊)
37 「中高年の息切れ 身近な肺の病気」25日開催:下方薫・医学系研究科教授が座長をつとめる	3.26 (月)	中日(朝刊) 他4社
38 「カレッジロックフェスティバル 07-スプリング」:本学の Back★Ground がグランプリに選ばれる	3.26 (月)	中日(朝刊)
39 「産官学連携」動き拡大:本学と豊田通商先月協定を締結 産業技術総合研究所との間でも協定を締結 4月に技術交流会を開く予定	3.27 (火)	読売
40 能登半島地震:安藤雅孝・環境学研究科地震火山・防災研究センター教授「直下型地震の予測は困難でありどこで起きても不思議ではない」と語る	3.27 (火)	読売
41 名古屋城本丸御殿の再建をアピールするイベント「春姫道中」で第13代春姫に、東葉依子さん・本学学生が選ばれる	3.27 (火) 4. 7 (土) 4.12 (木) 4.13 (金) 4.14 (土)	読売 中日(朝刊) 読売 中日(夕刊) 読売 中日(朝刊)
42 学生之新聞:卒業特集号編集長・尾関雄一朗さん・本学学生 恩師と語り合う 学生スタッフに送る言葉 西原和久・文学部教授 尾関雄一朗さん・本学学生へ「積極的で必ず活躍」	3.27 (火)	中日(朝刊)
43 時日記:就活座談会 学生スタッフ ゴールじゃなく通過点	3.27 (火)	中日(朝刊)
44 編集部から:尾関雄一朗さん・本学学生 卒業証書の重み	3.27 (火)	中日(朝刊)
45 はなむけの手相占い:鈴木絵里さん・本学学生 「自分を見つめ直せるのが面白い」	3.27 (火)	中日(朝刊)
46 佐分晴夫副総長が愛知県公立大学法人の理事に非常勤で就任する	3.27 (火)	中日(夕刊)
47 古い木造住宅耐震化 福和伸夫・工学研究科教授の開発した「ぶるる」で危険啓発	3.27 (火)	中日(夕刊)
48 柔道場の畳を寄贈した二村雄次・医学系研究科教授に感謝状が贈呈される	3.28 (火) 3.29 (木)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
49 本学 大学院博士課程後期課程の学生を対象に07年度から総額約1億円の奨学金と海外派遣の制度を設ける	3.28 (水)	朝日(朝刊)
50 中部の教育 名大とアジア⑤:法整備で民主化を支援 粘り強い努力が必要 国も積極的に関与を	3.28 (水)	読売
51 本学南半球宇宙観測研究センターらのチームが、「NANTEN2」を使った観測で高温・高密度のガス雲を発見	3.28 (水) 3.29 (木)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
52 トーク集会「全国学力テスト」で教育は「再生」するか?:全国学力テストの狙いや問題点について犬山市教委の中嶋哲彦・教育発達科学研究科教授他が課題提起を行う	3.28 (水) 4. 2 (月)	朝日(朝刊) 中日(朝刊)
53 鍋島俊隆・医学系研究科教授他の研究チームは、アルツハイマー病のワクチンを開発	3.29 (木)	朝日(朝刊)
54 聴覚障害乗り越え本学工学部へ入学 坪井泰樹さん	3.29 (木)	中日(夕刊)
55 工場癒す会話型ロボについて 大熊繁・工学研究科教授「生産ラインで機械と人間との間をロボットが仲介して、フレンドリーな関係をつくろうとするのは新しい」と語る	3.29 (木)	中日(朝刊)
56 おあしす:舛名大(田中周一さん・本学学生)へ体育会が「特別表彰」を贈る	3.30 (金) 4. 2 (月) 4. 3 (火)	読売 日経(朝刊) 中日(朝刊)
57 医師国家試験:本学合格率 95.2%	3.30 (金)	中日(朝刊) 読売
58 「宇宙100の謎 大発表会」1日開催:全国から募った質問に教員や大学院生が回答 質疑応答のコーナーも有り	3.31 (土)	朝日(朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
59 本学、東大、千葉大と東北大で、「地球機構の診断にかかわるバーチャルラボラトリー」を設立 共同で気候予測を行う	3.31 (土)	日経 (夕刊)
60 無投票当選について：磯部隆・法学研究科教授「無投票当選は、選挙を通じて政治について考えたり話しあったりする機会を奪う。政治的なレベルで工夫し候補者を作る必要がある。」	3.31 (土)	読売
61 中日新聞を読んで：活気づく桜の季節 中西久枝・国際開発研究科教授	4. 1 (日)	中日 (朝刊)
62 鶴舞キャンパス敷地内全面禁煙を4月1日から実施	4. 1 (日)	朝日 (朝刊)
63 本学 07年度文部科学省の「先端研究施設共用イノベーション創出事業」の産業戦略利用分野で「高性能電子顕微鏡群を用いたナノ・バイオサイエンス支援事業」が採択された	4. 2 (月)	日刊工業
64 浅井滋生・工学研究科教授他のグループ：磁気濾過装置を低コスト化できる磁性化学吸収剤を開発	4. 2 (月)	日刊工業
65 「エイズとの闘い—その最前線2007」山本直彦・医学系研究科助教授が「世界のエイズ・日本のエイズ」を幅広い観点から語った	4. 2 (月)	中日 (夕刊)
66 学長顕彰：学業部門 溝口祐司さん・工学部機械・航空学科3年、水本有紀さん・農学部資源生物環境学科4年 課外活動への取り組み部門「震災ガーディアンズ」	4. 3 (火)	中日 (朝刊)
67 健康東海プラザ：医学部附属病院長・松尾清一・医学系研究科教授 「法人化で業務、患者サービスが改善された。今後も機構改革を」と抱負を語る	4. 3 (火)	読売
68 連載終了「江戸面白本の世界」塩村耕・文学研究科教授：古書に人生を学ぶ	4. 3 (火)	中日 (朝刊)
69 「中日健康セミナー あなたもドライアイではありませんか ドライアイという病気について考える」25日開催：パネリストとして平野耕治・医学部附属病院助手、杉田二郎・医学部附属病院助手が参加	4. 3 (火)	中日 (朝刊)
70 時日記：高田浩司さん・本学学生 今どき「性別分業」なんて	4. 3 (火)	中日 (朝刊)
71 時のおもりの：総合研究大学院大学教授・池内了・本学名誉教授 暖冬と生態系の変化 みんなが「科学者」になる	4. 4 (水)	中日 (朝刊)
72 本学 5日入学式 4488人が入学	4. 5 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (夕刊)
73 五島剛太・高等研究院特任准教授らのグループ ショウジョウバエの全遺伝子を解析し、細胞分裂に必要な遺伝子を特定することに成功	4. 6 (金)	中日 (朝刊)
74 文科省の07年度「国際的な産学官連携の推進体制整備」の採択機関に本学が選定される	4. 6 (金)	日刊工業
75 山本昭平・生命農学研究科教授が読売農学賞を受賞	4. 6 (金)	読売
76 伊勢田哲治・情報科学研究科准教授 「疑似科学との分かれ目は『仮説に対する態度』反証あつてこそ科学」と語る	4. 6 (金)	朝日 (朝刊)
77 無料体験講座：荒深裕規さん・本学大学院生が「元気で若さを保つためのストレッチ体操とレジスタンス運動」を指導	4. 6 (金)	中日 (朝刊)
78 あの人に迫る：豊川高校教諭・宮本延春氏・本学卒業生 新しく学ぶこと世界広げる一歩	4. 6 (金)	中日 (夕刊)
79 本学学生で人気の高いアルバイトは圧倒的に家庭教師	4. 7 (土)	日経 (朝刊)
80 今津孝次郎・教育発達科学研究科教授 著書「いじめ問題の発生・展開と今後の課題」に新たに加筆した増補版を緊急出版	4. 8 (日)	中日 (朝刊)
81 本学卒業生の愛知県議当選者：近藤良三氏 本学卒業生の名古屋市議選当選者：齋藤亮人氏、桜井治幸氏、うえぞのふさえ氏、江上博之氏、樽松順子氏、田口一登氏	4. 9 (月)	中日 (朝刊)
82 本学他の研究チームがマウスの実験で不整脈の一端を解明	4. 9 (月)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊) 日刊工業
83 学生之新聞：平野真一総長 入学式で「豊かな人間性を持つ国内外でのリーダーに」と新入生にエールを送る	4.10 (火)	中日 (朝刊)
84 本学 論文引用回数 世界99位 国内5位	4.10 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 日経 (朝刊) 日刊工業
85 本学附属病院：愛知県の災害拠点病院に新たに指定される	4.10 (火)	中日 (朝刊)
86 数理ウェブ：鈴木紀明・多元数理科学研究科准教授が「複素数から四元数へ」、大沢健夫・多元数理科学研究科・教授が「iは地球を救うか(その5)・・・円周の等分」と題して講演	4.10 (火)	中日 (朝刊)
87 時日記：高田浩司さん・本学学生 連載初日、息子を病院へ	4.10 (火)	中日 (朝刊)
88 本学留学生会が21日「春のバザー」を開催	4.10 (火)	中日 (朝刊)

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成19年3月16日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
89 沓名宗春・工学研究科教授他の研究グループ：パルス光レーザーを用いて金属やセラミックスなどの粉体を金属部分などの表面に打ち込むレーザーピーニング技術を開発	4.11 (水)	日刊工業
90 中京テレビ番組審議委員に、的場正美・教育発達科学研究科教授が選ばれる	4.11 (水)	読売
91 東海テレビ放送の番組審議委員に、福和伸夫・環境学研究科教授が選ばれる	4.11 (水)	中日 (朝刊)
92 叙位叙勲：正四位 宮原豊・本学名誉教授	4.11 (水)	読売
93 07年度国際ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラムは、国際プロジェクトのヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラムの「CAD分野」で平田晋三・理学研究科助手の「発生過程のグリシン受容体凝集の分子基盤」を採択	4.12 (木)	日刊工業
94 山口茂弘・理学研究科教授「典型元素を導入した新たな $\pi$ 電子系材料の創造」で「ゴールド・メダル賞」を受賞	4.12 (木)	読売
95 「中国語談話クラス」21日開催：呂雷寧さん・本学大学院生が「流行語から見る中国社会の変化—インターネットから生まれた流行語」のテーマで講演	4.12 (木)	中日 (朝刊)
96 岩崎宗治・本学名誉教授 城山三郎さんの思い出：戦争体験原点 集団への嫌悪	4.12 (木)	朝日 (夕刊)
97 東海地方3月の地震：林能成・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教	4.13 (金)	読売
98 グレーター・ナゴヤ・バンガード構想 調査委員に聞く：片木篤・環境学研究科教授 若者の「たまり場」をつくり新しい文化や次世代の産業を	4.13 (金)	中日 (朝刊)
99 本学グライダーチーム 朝日新聞社に全日本グライダー競技選手権優勝報告	4.14 (土)	朝日 (朝刊)

## 第48回名大祭を6月7日(木)～10日(日)に開催

第48回名大祭が、6月7日(木)～10日(日)、東山キャンパスにおいて開催されます。同祭は、名古屋大学名大祭本部実行委員会の企画・運営による学園祭で、毎年約5万人の来場者数を誇る「東海地区最大規模の大学祭」です。

本年度のテーマは、「彩幻～サイゲン～」。「名大祭では普通の大学とは違う、彩り豊かな幻が現れる」という意味が込められています。

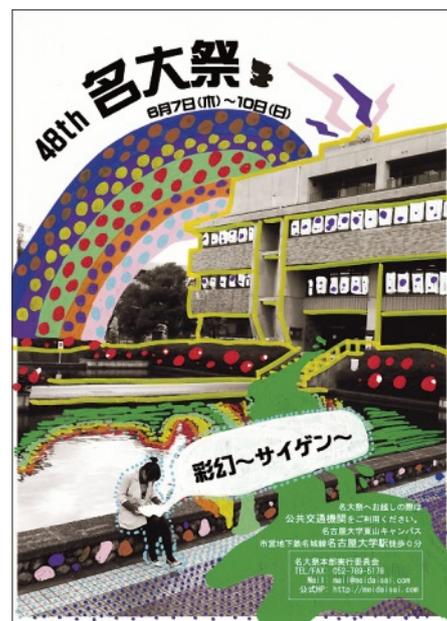
みなさまお誘い合わせの上、お気軽にお越しください。

### 第48回名大祭「彩幻～サイゲン～」

開催日程：6月7日(木)～10日(日)

会場：東山キャンパス（一部鶴舞キャンパス）

最寄駅：地下鉄名城線名古屋大学駅下車 徒歩0分  
(お越しの際は公共交通機関をご利用ください。)



>>趣向を凝らした様々な企画の一部をご紹介します。

#### ■サークル、部活動による約90種類の多種多様なイベント

企画名：「エレクトーンフェスティバル2007

～名古屋はええよ～

団体名：名大エレクトーンサークル WHITE COLOR

内容：ポップスを中心に様々なジャンルでのエレクトーンアンサンブル。歌やダンスもあり。

企画名：「バードマン フェスタ」

団体名：人力飛行機製作サークル Air Craft

内容：人力飛行機の一部やフライト写真などの展示。一部人力飛行機の製作作業も公開。

#### ■約40以上の研究室の一般公開、授業体験

企画名：「センター試験の数学・物理をコンピューターで解く」

研究室：工学部 古橋研究室

内容：工学部教授の授業を公開。今年1月のセンター試験の問題を題材に、コンピューターを駆使したビジュアル解法を紹介。

企画名：「日本の絵と書物で遊ぼう」

研究室：文学部 高橋研究室

内容：源氏物語の屏風絵や掛け軸と画帖等、日本の古典文学に関するお宝を公開。

その他、約120店舗の模擬店、約90店舗のフリーマーケットが来店します。

>>バリアフリー・環境への取り組みを行っています。

#### ■バリアフリーへの取り組み

事前段階で、「バリアフリーマップ」を作成し、学内の移動障害に関する情報を発信することで、障がい者の方や高齢者、妊婦、小さなお子さんの名古屋大学及び名大祭に対する不安を軽減し、安心して来場いただけるようにします。また、肢体障がい者の方向けに「名大祭ツアー」と称し、ガイドとの2人1組で名大祭を自由に回っていただく取り組みも行います。

#### ■環境への取り組み

会場に出されるゴミを9つの項目により細かく分別します。また、会場内に特別分別ゴミ箱を設け、スタッフを配置することにより、来場者に対し分別の案内を行い、模擬店出店者にもゴミの分別を手伝ってもらうことで環境対策への意識の向上を図ります。その他、容易にリサイクルできる「はがせるトレー」を模擬店出店者に安価で斡旋したり、分煙を進めるなど、環境に対する取り組みを来場者と一緒に行います。

#### 問い合わせ

名大祭本部実行委員会

TEL:052-789-5178

E-mail:mail@meidaisai.com

URL:http://meidaisai.com

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**4月10日(火)～7月21日(土)**  
 場 所：博物館  
 時 間：10時00分～16時00分  
 入 場 料：無料  
 休 館 日：日・月曜日

**第11回名古屋大学博物館企画展**  
 テー マ：「地球は玉手箱～誕生石の魅力～」



[問い合わせ先]  
 博物館事務室 052-789-5767

**5月16日(水)～6月27日(水)**  
 場 所：博物館講義室  
 時 間：10時30分～12時00分  
 入 場 料：無料  
 定 員：60名(名古屋市生涯学習推進センターにて申し込み)

**大学連携キャンパス講座**  
**「おもしろ博物学」(全7回)**  
 内 容：博物館専任教員7名によるリレー形式での講義  
 講 演 者：西川輝昭(博物館教授) 他  
 主 催：名古屋市生涯学習推進センター

[問い合わせ先]  
 博物館事務室 052-789-5767

**5月19日(土)**  
 場 所：知多半島礫ヶ浦海岸  
 時 間：8時20分～16時00分  
 定 員：40名  
 参 加 費：500円(保険料)

**中学生のためのネイチャーウォッチング**  
 講 師：西川輝昭(博物館教授)、足立 守(博物館教授)

[問い合わせ先]  
 博物館事務室 052-789-5767

**5月29日(火)**  
 場 所：環境総合館1階  
 レクチャーホール  
 時 間：18時00分～19時30分  
 入 場 料：無料

**第29回防災アカデミー**  
 講演題目：「どこまでできる地震予知」  
 講 演 者：山岡耕春(環境学研究科教授)



[問い合わせ先]  
 災害対策室 052-788-6038

**5月31日(木)**  
 場 所：生命農学研究科 B 棟319号室  
 (予定)  
 時 間：15時30分～17時00分(予定)

**ICCAE2007年度**  
 第1回オープンセミナー  
 講演題目：「在地の情報理解から始まるサヘルの農業開発」  
 講 演 者：林 慶一氏(JIRCAS 研究員)

[問い合わせ先]  
 農学国際教育協力研究センター  
 浅沼修一教授 052-789-4232

**6月1日(金)**  
 場 所：名古屋銀行協会銀行倶楽部  
 時 間：18時00分～20時00分  
 入 場 料：無料

**名大 ERC・キタン会**  
**名古屋ビジネスセミナー**  
 講演題目：「アジアの発展と日本経済」  
 講演者：原田 泰氏(大和総研チーフエコノミスト)

[問い合わせ先]  
 経済学研究科  
 附属国際経済政策研究センター  
 052-789-4941

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

## 6月2日(土)

場 所：博物館野外観察園  
時 間：13時00分～14時30分  
参 加 費：無料

## 博物館野外観察園見学会

案 内：西田佐知子（博物館助教）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

## 6月2日(土)

場 所：博物館講義室  
時 間：15時00分～16時30分  
入 場 料：無料

## 第70回博物館特別講演会

講演題目：「岐阜県苗木のペグマタイト鉱物」  
講 演 者：大林 達生氏（中津川市鉱物博物館学芸員）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

## 6月7日(木)～10日(日)

場 所：東山キャンパス構内

## 第48回名大祭

テーマ：「彩幻 ～サイゲン～」

[問い合わせ先]

学務部学務企画課 052-789-2164



## 6月9日(土)

場 所：博物館講義室  
時 間：15時00分～16時00分  
入 場 料：無料

## 第71回博物館特別講演会

講演題目：「ヒトの知覚と重力～スペースシャトル・エンデバー号での実験～」  
講 演 者：古賀 一男（エコトピア科学研究所教授）  
共 催：名古屋大学博物館友の会共催

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

## 6月23日(土)～7月8日(日) 間の土・日

## 第56回東海地区国立大学体育大会

内 容：東海地区国立8大学の運動部が参加  
主 管 校：名古屋大学

[問い合わせ先]

学務部学務企画課 052-789-2164

## 6月27日(水)

場 所：環境総合館1階  
レクチャーホール  
時 間：18時00分～19時30分  
入 場 料：無料

## 第30回防災アカデミー

講演題目：「液状化の謎に迫る ー地盤工学のアプローチー」  
講 演 者：浅岡 顯（工学研究科教授）

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

## 6月30日(土)

場 所：博物館講義室  
時 間：15時00分～16時30分  
入 場 料：無料

## 第72回博物館特別講演会

講演題目：「新鉱物発見物語」  
講 演 者：松原 聡氏（国立科学博物館地質部長）

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

名大トピックス No.168 平成19年5月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail [kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp](mailto:kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp)

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ  
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

#### 表紙

本番さながらの練習風景。  
(バレーボール部(女子部))  
(平成19年3月17日)



## 61 地域社会に支えられてきた名古屋大学

名古屋大学では、昨年6月、創立70周年事業として、「名古屋大学基金」を創設しました。長期的な大学基盤の整備のため、多くの企業・団体・個人の皆様にご協力をお願いしています。

歴史をひもときますと、名大が一貫して名古屋を中心とする地域によって支えられてきたことが分かります。そもそも明治初期、名大の源流にあたる愛知医学校が、浄土真宗からの寄附と新地方税の6万円によって設立されたものでした。6万円は、現在の約7億円にあたります（同年代の標準米価格で換算、以下同じ）。

また、1920（大正9）年に県立愛知医科大学に昇格した時は、県会でその費用約70万円（現在の約10億円）の支出が可決されています。県の歳出総額がようやく1,000万円をこえた時代です。1931（昭和6）年に官（国）立に移管され名古屋医科大学となった際にも、県から国へ50万円（約14億円）が寄附されました。

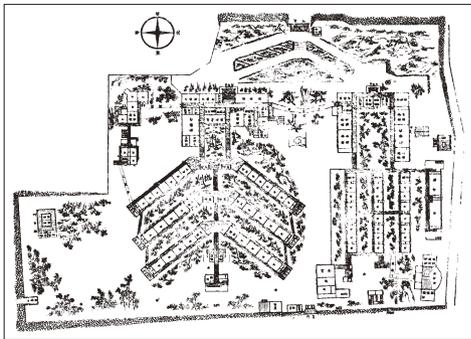
そのほか、旧教養部の前身にあたる官立第八高等学校

（1908年）は、愛知県による約30万円（現在の約10億円）の、また経済学部の前身にあたる官立名古屋高等商業学校（1920年）は、県と名古屋市からの約64万円（約9億円）の国への寄附によって誘致されました。

そして、1939年に名古屋帝国大学が創設された際には、愛知県がその創設費全額の900万円（現在の約128億円）を負担したのです。これは、同年度の県歳出総額の約20%にあたるものです。広大な東山キャンパスの敷地も地元から無償で提供されました。

戦後の復興や学部新設も、名古屋帝国大学復興後援会が結成されるなど、地域の全面的な協力によるものでした。とりわけ農学部の創設には、県や諸団体から約1億円（当時の県歳出が約105億円）が寄附されています。

名大は日本の基幹大学の一つであり、世界水準の教育・研究を推進する知の拠点であるのはもちろんですが、こうした歴史をみる時、地域社会への貢献も忘れてはならないと思います。



**東海文化の誇り  
名帝大けふ誕生**  
澁澤博士非常時総長ふり

名大の前身は、明治18年（1885）に創立された愛知医学校・公立病院（翌年愛知医学校・愛知病院となる）の校舎（右＝北側）・病棟（左＝南側）図。現在は名古屋市中区栄1丁目、トーエネックの社屋がある。1914年に鶴舞キャンパスへ移転した。

2 第八高等学校全景。1964年まで名古屋大学瑞穂キャンパス（教養部）として使われていた。現在は名古屋市立大学山の畑キャンパス（名古屋市瑞穂区瑞穂町）になっている。

3 1939年、名帝大医学部になる直前の名古屋医科大学全景（現在の鶴舞キャンパス）。

4 名古屋帝国大学の誕生を報ずる大阪朝日新聞（1939.4.1）。「東海地方多年の熱望こゝに成つてけふ一日花やかにも東海文化の最高峰われらが名古屋帝大は創設された。」

建設

注文

人事の發令

札幌の朝日大生名大けふ誕生会報第40号